

非文字資料研究

The Study of Nonwritten Cultural Materials



非文字資料研究

The Study of Nonwritten Cultural Materials

News Letter

2006.3
No.11

CONTENTS

表紙写真説明



春先、ブナの木の新芽吹きの中で、鉄砲打ちの名人、故皆川喜助氏（大正3.5.22生）が獲物に狙いを定める。長年の経験がこの一瞬に凝縮する。

皆川さんは奥会津の狩猟集落として知られた只見町旧田子倉出身、ダム湖底に沈んだ集落には熊やカモシカの集団狩猟をする2組のシシヤマ組がかつては存在したが、その一つ白戸組の一員であった。田子倉には明治20年代までは秋田から旅マタギも訪れていた。シシヤマの統領をヤマサキといい、サンジン（山神）を奉戴し、狩猟の全体を指図した。山中での山言葉の使用、山小屋での作法から、ヤマサキが携帯した巻物には、ナデ（雪崩除け）の呪文が必ず載るなど、山神に対する強い信仰が認められた。

皆川さんは田畑、カノ（焼畑）山菜採りの生業複合の中で、冬季・春季を狩猟に充てた。岩魚・鱒など川漁の名人でもあった。豪雪地域の山村生活を一身に体現していたといえる皆川さんは、2004年春に鬼籍に入られた。狩猟伝承を中心にした自然と人の交渉史の語り部がまた一人消えてしまった。

（佐野 賢治）

写真提供：福島県只見町教育委員会・新国 勇氏

巻頭言 3
大里 浩秋（外国語学研究科委員長・COE事業推進担当者）

ワークショップ
報告 第1班公開研究会
「図像から読み解く東アジアの生活文化」

開催の主旨 4
鈴木 陽一

『姑蘇繁華図』と『清明上河図』の比較 6
戴 立強

蘇州における民俗生活の現状 7
馬 漢民

仏画「甘露幀」にみる民俗演戯の諸相 8
張 長植

都市図における風俗表現の機能 9
金 貞我

研究エッセイ ESSAY

屏風絵を読むにあたって 10
「江差松山屏風」の読み取り体験から
田島 佳也

なぜ「道具」ではなく「民具」なのか 14
河野 通明

フィールドノート Field Note

韓国を少し知るヒント 自転車とオートバイ 16
櫻村 賢二

むらの風景が語るもの 世界遺産白川郷を訪ねて 18
藤永 豪

海外博物館事情 Foreign Museums

ブラジル
歴史変遷の象徴 20

サンパウロ市の2つのミュージアム
菊池 渡

コラム 日・中の民間芸能の比較 伝統の異なる変遷 22
岳 永逸

2006年度以降の組織変更 24

受贈図書一覧 26

主な研究活動 28

コラム 『民俗学誌（Folklore Studies）』について 30
王 京

彙報 31

Report & Information 32

神奈川大学21世紀 COEプログラムに 寄せて

巻頭言



外国語学研究科委員長・COE事業推進担当者

大里 浩秋

神奈川大学がCOEの共同研究を開始してからすでに3年が過ぎて、私に書く番が回ってきた。そこで、この機会を利用して、個人的な経験も含めて今考えていることを記したいと思う。

4年前の春私は在外研究に出かけて1年間留守をしたので、その間の準備には預かっていない。それでもたまたま、COEとか非文字資料とかいう耳慣れぬ言葉が滞在先の上海に届くことがあり、しかし理解及ばずで、一体何をやろうとしているのだらうと思っていた。学部が違って普段顔を合わせたこともない人がかなりの数集まって共同研究をするという情報に、うまくやっていけるのかなとも感じた。

私のささやかな経験では、共同研究は言うは易しで、誠に厄介な代物である。無理矢理集めると戦力にならない人が出てくるし、積極的に参加した人でも自己主張が過ぎるとグループのまとまりを欠くことになり、テーマを煮詰めきれぬまま時間が過ぎて、いざ成果を発表する段には個人研究の寄せ集めになってしまうなどなど。

在外研究から戻ったときが我がCOEプログラムが始まるときと重なって、私もその末席に連なることになった。そしてこの間しきりに感じたことの1つは、やはりメンバーの共同研究に対する認識の不統一があるという点であった。自分の得意とする分野で調査し報告書を書けばそれですむというものではないのであり、他のメンバーの調査研究に耳を傾けお互いの考え方の違いについて根気よく意見をぶつけ合って、テーマに即した結論を導き出す必要があるが、「共同」することの苦勞に多くのメンバーが慣れていないのである。

もう一つ、COEプログラムは院生を含む若手研究者の育成をきわめて重視しているが、それは大事なことであると誰もが認めつつ、それでは一体どんな方法で育成するかには習熟していないという点である。他でもなく私自身が、これまでの研究でも今回のプログラムでも、院生の能力を引き出すべく大いに彼らを動員したとは言いがたい。

それゆえに、今思うのはリーダーを始めとする諸氏のこの間のご苦勞であるが、3年の月日は決して無駄ではなかったのであり、共同研究の不慣れさを徐々に克服しつつあると感じている。学部や専門の異なるメンバーの組み合わせが苦にならなくなり、各メンバーが分担して進めてきた研究成果を共通の場で発表し議論する機会が増えたことはその表れであろう。また、若手研究者の育成については、中国言語文化専攻の場合そもそも院生の数が少ないという問題を解決しなければならないので、事は簡単にはいかないが、残る2年のうちにCOEの掲げる目標に少しでも近づぐための努力をしなければと考えている。

4年目のスタートは、もはや切られているのである。



プログラムスケジュール

2005年12月10日(日)

- あいさつ 福田 アジオ(神奈川大学教授)
 司会進行 鈴木 陽一(神奈川大学教授)
 研究発表
 戴立強(中国・遼寧省博物館研究員)
 「『清明上河図』と『姑蘇繁華図』」
 馬漢民(中国・中国俗文学学会常務理事)
 「蘇州の生活と民俗」
 張長植(韓国・国立民俗博物館民俗研究科学芸研究官)
 「朝鮮時代の仏画(甘露幀)にみる伝統娯楽の諸相」
 金貞我(神奈川大学21世紀COEプログラム共同研究員)
 「都市図における風俗表現の機能」
 討論

主催：神奈川大学21世紀COEプログラム
 「人類文化研究のための非文字資料の体系化」第1班

開催の主旨

鈴木 陽一

一班の出発点は、日本常民文化研究所の資産である、中世の絵巻物から造られた『絵巻物による日本常民生活絵引』(以下『絵引』)にある。この貴重な文化遺産の存在を世界に知らしめ、データとして利用可能にすること、そのために『絵引』のキャプションを複数の言語で翻訳することが重要な課題となっている。

更に一班では『絵引』を出発点として、これを時間と空間の双方向に拡大することを計画した。すなわち、絵引きの対象を日本の中世から近世へと広げること、同時に日本を離れて東アジア地域に対象を広げること大きな目的として掲げた。その中で我々のグループは、空間の拡大、つまり東アジアにおける図像資料から、日常生活に関わる新たな『常民生活絵引 東アジア版』を作成すべく、研究、調査、更に此に基づく作業を開始した。しかし、我々はまずその第一歩、すなわちどの図像を絵引きの対象とするのかということから困難に直面することになった。

朝鮮半島の図像資料については、美術史の専門家である金貞我氏の努力により、比較的早い段階で朝鮮時代に制作された風俗画がその対象となりうる事が明らかとなり、調査、研究を始めることとなった。しかし、東アジ

アの中でも中国文化については、事はそう容易ではなかった。古典を規範とする意識があまりにも強烈な中国文化においては、生活それも庶民の生活をリアルに描くことそれ自体がほとんどあり得ないことであった。文字であろうと、図像であろうと、実態がどうであるかということよりも、「～であらねばならない」を優先させる人々にとっては、描かれるものは常に頭の中のイメージであればよかったのである。そのため、中国においては何を絵引きの対象とすべきかが、一班全体にとっても極めて厄介な問題であった。

その後、いくつかの庶民生活と関わる図像資料を比較検討した結果、我々が選択したのは18世紀、乾隆年間に徐揚によって描かれた「姑蘇繁華図」(以下「繁華図」、通称「盛世滋生図」という一巻の画卷であった。「繁華図」は蘇州の郊外、太湖付近の木流鎮から蘇州の城門に至る風景と、その繁盛ぶりを描いたもので、近年その資料的価値が注目され、中国は無論、日本でも本格的な研究の対象となり始めていたものである。そこで、我々はまず原本の影印本やネットで公開された電子映像の中から比較的良質のものを選び出し、これを拡大した上で、数十の場面に分割し、一つ一つの画面から人物、服装、動作、道具、商品、食品、招牌など多くのモノとコトとを分節し、解読を試みていった。

しかし、その過程で更に我々はいくつかの問題にぶつかった。箇条書きに列挙する

影印本の印刷が不鮮明で、事物や動作については十分に読み取れないものが少なくない。

動作、事物が映像としてはっきりと見えていても、一体それが何を意味するのかが分からない。例えば天秤棒で荷を担う姿が数多く描かれるが、一体何を担っているのか、棒手ふりなのかただの運搬人なのか、その図像の意味するところを解読できない。

蘇州の実際の風景、或いは当時の人々の暮らしぶりがおよそどのようなものであり、それがどの程度リアルに反映しているのかが把握できない。

こうした問題を解決するために、我々はいくつかの対策を講じた。まずよりよい図像、すなわち「繁華図」の原本にできるだけ近いものを入手することが必要となっ

た。そこで、原本を所蔵する遼寧博物館を二度訪問し、同博物館の研究員である戴立強氏の援助により、原本を見ることができた上に、極めて原本に近い画像を我々の研究に於いて二次利用することが可能になった。

また、画像と現実の風景や、当時の民俗との関係を明らかにするために、蘇州に二度の調査を行うとともに、蘇州民俗の研究者によるレクチュアを受けることにした。その結果、画像が他の中国の画像に比して、蘇州郊外の現実の風景、そして蘇州の民俗が相当程度リアルに写されていることが明らかになった。我々が「繁華図」を絵引きの対象としたのは少なくとも誤った選択ではなかったのである。

このように我々の研究の基礎が次第に固まってきた状況を踏まえ、更に大きく前進させるために、上記の諸問題、すなわち「繁華図」を絵引きの対象とするために解決すべき様々な問題について、専門家を招聘して研究会を開くこととした。同時に、平行して研究を進めている朝鮮半島の、絵引きの対象となる風俗図についても、解読のためのリファランスとなりうる新たな資料について報告を受け、合わせて東アジア全般の画像資料について考察を深めることとした。

研究会は2005年12月10日、神奈川大学において公開で開催された。当日は師走の土曜日であり、他の研究機関でも多くのシンポジウムなどが開催されていたが、こちらの予想を超える市民が参加し、大いに盛り上がった。

報告者と報告のタイトルは以下の通りである。

戴立強「『清明上河図』と『姑蘇繁華図』」(中国語)

馬漢民「蘇州の生活と民俗」(中国語)

張長植「朝鮮時代の仏画(甘露幀)にみる伝統娯楽の諸相」(韓国語)

金貞我「都市図における風俗表現の機能」

個々の発表の内容についてはそれぞれの先生方御自身による文章を御参照いただくとして、全体の流れについて、司会を勤めたものとして一言申し添えておきたい。

今回の研究会では、「繁華図」の中国美術史、特に風俗を描いた絵巻物の歴史の中での位置づけから始まり、「繁華図」の背景となった蘇州とその民俗についての簡略ながら深みのある分析につながり、仏画という異なる画像資料によって東アジアの画像資料の広がりとお興行きが示され、最後に東アジア全般の都市を描いた画像の位置づけと枠組みについての俯瞰的な見通しが提示され、決して自画自賛ではなくまことに「起承転結」という言葉そのままに鮮やかにまとまりを見せて収束することができたと思う。戴、馬、張の各先生はわずか数日の滞在でもあり、必ずしも十分な打ち合わせ時間が確保できず、また当日も通訳付きであったために、実際の発表時間は極めて短いものとせざるを得なかった。にもかかわらず、見事にまとまりをみせたのは、各先生が我々の研究の目的を十分に理解し全面的に協力してくださったことによるところが大きい。ここに記し、深甚なる謝意を表す。



研究会全景

戴立強氏(写真左)による報告



張長植氏(写真左)による報告



鈴木陽一教授による司会進行



金貞我氏による報告



馬漢民氏(写真左)による報告



「姑蘇繁華図」と「清明上河図」の比較

戴 立強（中国 遼寧省博物館・副研究員）

中国の絵画史上、社会生活を表現する風俗画は、その豊かな内容、独特な美意識、リアリズムという手法などで知られている。宋朝・張昞端の「清明上河図」と清朝・徐揚の「姑蘇繁華図」はその代表作といえる。これらの作品は「長巻」(画卷)という形で当時の社会生活を表現しており、不朽の名作であると同時に、ビジュアルな資料としても価値が高く、まさに社会百科全書的な「歴史絵巻」という名に相応しい。

徐揚は、その生没年は明らかではないが、先祖代々、蘇州で生活していた。乾隆16(1751)年に乾隆帝が初めて南巡(江南地域に御幸)するとき、絵を献上したことで宮中に呼ばれ、画院の供奉になり、拳人の出身と内閣中書という職を与えられた。乾隆24(1759)年、彼は名作「姑蘇繁華図」を作画した。なお、記録に残された徐揚の作品は35点ある。

張昞端は山東東武の出身で、その生没年は不詳である。幼い頃、北宋の首都・汴梁(今の河南省開封)に遊学し、後に絵を学び、翰林待詔という職を授けられた。彼の作

品である「西湖争標図」「清明上河図」は、「神品」(最高傑作)に選ばれた。

徐揚と張昞端は平民出身の宮廷画家という共通の立場を有し、「姑蘇繁華図」と「清明上河図」は、太平無事の盛世を讃えるという同じテーマを持っている。二つの作品はともに春を描いており、ともに郊外の農村から着筆している。そこに「一年の季は春にあり、一国の計は農にある」という中国で強い影響力を持つ伝統的な理念が蘊蓄されており、二人の構想は極めて類似しているといえよう。

徐揚と張昞端は優れた技巧の持ち主であると同時に、土地の風土人情にも詳しい。その観察は詳細を究め、対象の特徴をよく把握している。彼らの生き生きとした描写は、見る者を描かれた場面に引き込むような力を持っている。「姑蘇繁華図」と「清明上河図」の両作品は、社会の現実に密着し、生活の匂いを感じさせるからこそ、芸術品としての力強さと、ビジュアル的な史料としての高い価値を持ち合わせたのである。

図1



「堀に架かった橋の上の乞食」(「清明上河図」部分図)

木製の橋の上には多くの人々が集まっている。親子の乞食に旅行者らしい二人が洪々金を与えている。右側の乞食の子供が一所懸命ねだっているが、赤ちゃんを抱いている男はさっぱり相手にしてくれない。張昞端の筆により、世の中の冷たさが鮮やかに描かれている。

図2



「大道芸人」(「姑蘇繁華図」部分図)

閭門の南、城外の埠頭では、大道芸が行われ、たくさんの見物人や、隣家の窓から眺めている店員も描かれている。若い女の子が手に長竿を握り、綱渡りをしている。小さな歩幅で足を前後に動かす様までいきいきと再現されている。この絵から、私たちは当時の生活の匂いまでも感じることができるに違いない。

蘇州における民俗生活の現状

馬 漢民（中国 中国俗文学学会常務理事）

蘇州は、2600年の歴史を持っている古い町である。幾たびか世の転変を経たが、伝統的民俗文化は、現代の生活にも豊かつ多彩な形態で受け継がれており、蘇州文化の魂で有り続けている。ここで、蘇州における民俗生活の現状を簡単に紹介しよう。

蘇州民俗の外在的表現

1. 有形民俗（目で見える民俗事象）

廟会、春戯（春の祭りで上演する芝居）、走月亮、嫁送りと嫁迎え、梁上げ、葬儀、墓参り、家屋の飾りつけ、服飾、家屋用の魔除け、年中行事の飾りつけ、様々な図像、彫刻や飾り物などが、形が見える民俗である。

男の子が生まれると、まず「龍蛋」といわれる赤く染めた卵を持って、近所と親族のところに知らせに行き、喜びを多くの人々に伝える。一ヵ月後、「湯餅筵」ともいう「剃頭洗礼」を行い、男の子の産毛を剃り、客を招いて宴会を開いて祝う。これは公衆の前で行わなければならない。農耕社会において、労働力は非常に重視されており、これで家の後継者を公認してもらうためである。次は、毎年の旧暦4月14日に、蘇州の閶門の南浩街で行う「軋神仙」という廟会と8月18日に蘇州の西郊にある石湖で行う「走月亮」という行事がある。前者は仙人の呂洞賓への崇拜に関する行事であり、後者は当地の人々の月崇拜に関する行事である。両方とも幸福、平安、健康などを行事の目的としている。「軋神仙」の当日、現場で販売される物の品名には、すべて「神仙」の字がつけられている。「走月亮」は若い男女の出会いの場であり、その時には、男が女の胸を触っても怒られることがない。

旧暦の1月5日に「路頭」を迎える。「路頭」とは、民間で信仰されている「財神」であり、東西南北中の五つの方位を管理しており、「路頭」を迎えられる人は、一年中大儲けができると見なされる。それゆえ、必ず夜明けの時に街に出、香を炊いて爆竹を鳴らして財神を祭ってから営業を始める。子供の入学の日、親は必ずその鞆をひっくり返してから本を入れる。これは「書包翻身」といい、子供はよく勉強して、家のため名を挙げることを願っているのである。

2. 有形文化と心意現象の結合

蘇州のいたるところに、敷地の前に立てられる石や、門の上にかけてある飾や鏡、大蒜、福祿袋などがよく見られる。これらは端午節に艾や菖蒲を軒に挿すことと同じで、悪を除き、福を招くためである。また、家に病人

がいると、門に桃の木の枝を飾り、来訪者に立ち入らないように示す。このような民俗は、病人のため静けさを保つほか、病気の伝染を防止する役割も果たしている。蘇州の名所虎丘の後ろに、「頼債（借金を踏み倒すの意）廟」という小さな廟があった。一年の借金を清算する大晦日、借金の返済ができない、あるいはしたくないものがこの廟に入ってしまうと、掛け取りは取り立てができないという約束事があり、それはきちんと地元では守られていた。ここに民俗が規範として機能していたことが見て取れる。

蘇州民俗の新しい変容

時代と科学の発展に伴い、非科学的な民俗は消えたり変わったりしてきた。たとえば、昔はマラリアを治療するには、水を壺に入れ、鏡を見るように病人の顔を水面に映してからすぐその壺を密封した。この方法によって、魂が守られ、もう病魔に襲われることがないと信じていたのである。また、なかなか妊娠しない女性がいると、中秋前後に「送秋」の呪いが行われる民俗事象があった。晴れの日の夜に、子供の多い家の台所に忍び込み、お玉の柄や牛をつなぐのに使う棒などを盗み、赤い布で包んでその女性のベッドに置くのである。このような呪術は性器崇拜の一種であり、今はもうほとんど行われなくなった。女の子が嫁に行く前夜、親族の女性とその家に集まり、泣きながら歌って惜別する民俗があったが、今はもう完全になくなってしまった。昔、蘇州辺りの農村に、人の葬儀で大きい声で泣き、葬儀の悲しい雰囲気盛り上げて生計を立てる女性の業者がいたが、今はもういない。

近年、子供が大学に進学すると、母方の伯父は必ず衣装やスーツケース、ないしパソコンを贈るようになった。新しい家に入居すると、母方の伯父が台所用品ないし電気製品を揃えるほか、桶二つを用意して、自ら水を汲んで担いで新居に入り、幸福が川のように絶えないようにと祈るほかに、葬式の期間は昔の四十九日から三十五日に短くなった。結婚式は、昔は三日間かかるが、現在は一日で全部済ませるようになった。明らかに、民俗の伝統が薄らぎ、変容しつつある。この他にも、秘密結社や娼家に関わる民俗は消えてしまったし、大晦日に家庭で一家団欒の食事を楽しむという重要な習慣も、生活の変化と経済水準の向上によって、レストランで行うようになってきている。便利ではあるが家での年越しにあった暖かな雰囲気が失われつつある。



仏画「甘露幀」にみる民俗演戯の諸相

張 長植（韓国 国立民俗博物館 学芸研究官）

韓国の仏画「甘露幀」^{かんろ ちよづ(1)}は、仏教儀礼用の宗教画として水陸齋（法会）の水陸画から派生したもので、韓国人の実生活や風俗が含まれている。特に、後期の甘露幀は、18世紀の実生活を描いた風俗画と深く結びつき、「宗教画」と「世俗画」という二つの性格を併せ持つ独特な様式になった。

筆者が興味を持ったのは、甘露幀の下段に描かれた図像で、なかでも民俗演戯と関連するものである。これは、多くの文献に散在する朝鮮時代の演戯の実状が把握できる視覚的資料であり、その中で演戯牌（演劇集団）と彼らが行う演戯の種目は当時の風俗を理解するのにもっとも重要な糸口になる。甘露幀の下端に、他の場面とともに聖と俗、生と死、過去と現在と未来などの対比を描くことで、さまざまな原因によって人々が死ぬ「死の世界」を暗示している。具体的には、「すでに完了した死」と「今進行している死」および「これから迎える死」を描いている。甘露幀は図像学的に非常に珍しい事例であるが、時空を超えて「起こりうる死」と「その死に関わる人々」を見せることで「甘露を通じて六道衆生を済度する」ことを提示している。

朝鮮時代の儀礼仏教は、仏教の民衆化の過程で展開されたが、それによって民衆層が仏教信仰の主体を形成するようになったと言えよう。言い換えれば、民衆層が仏教文化の発展で主体的役割を果たしたということである。それは甘露幀が民衆の実生活を反映していることから分かる。たとえば、朝鮮後期に入ってから、それまで描かれていた地獄相や地獄関連図の代わりに、実生活を表す農作や市場の場面などが描かれるようになる。それは、仏教信仰が民衆を対象にする意識中心のものとして定着する過程で、商工業を基盤とする民衆の営みが作品の構成要素に含まれて再創出されたためであろう。特に、下段の右側にはそれまで地獄像が描かれていたが、18世紀後半には当時流行した風俗画の素材である鍛冶屋、路上の酒屋、生地屋、果物屋、飴売りなどの場面に代替されるようになる。つまり、後期の甘露幀は風俗画と密接な関係を持ちながら展開したということの意味する。

それは、18世紀から活躍した金弘道（1745～？）・金得臣（1754～1822）・申潤福（1758～？）・李亨祿（1808～？）などが主に扱った風俗画の内容と比べるとはっきりする。甘露幀に風俗画の素材が大幅に取り入れられ、画風も金弘道の風俗画をはじめとする一般的な風俗画と似

通うようになったからである。

しかしながら、演戯牌と演戯種目の登場に関しては、風俗画的な側面からすべてを述べることはできない。演戯牌が登場したのは、当時の信徒が流民と奴婢を含む賤民が大半を占めていたことから端を発したという解釈もある。寺院と民間の風俗との内縁の実相が甘露幀の下段の素材として借用されたという見解も類似している。

実状がこのようであれば、甘露幀における演戯牌の場面は、二つの側面から新しい推論を提議することが可能である。第一に、演戯牌の場面は当時の桎梏に処した民衆の姿であり、結局、甘露幀を通じて済度に至るという浪漫的幻想を表現している。つまり、大乘仏教が用いた教化の一つの方便として活用されたのであろう。第二に、寺院の庇護の下で活動した寺党牌（放浪芸人集団）の歴史的展開と関連するもので、これを甘露幀に取り入れることで寺院が身分の低い存在まで包括的に関心を抱いていることを表明している。

このような点から、甘露幀はどの仏画よりも民を重視しており、身分と階級を超えて人間の問題を扱っているものと言えよう。すなわち、朝鮮時代の仏教が「抑仏崇儒」という国家の政策に向かって対応できるという論理ではないだろうか。



「直指寺 甘露幀」
（1724年）部分図
直指寺所蔵

図版出典：姜友邦・金承熙著『甘露幀』圖書出版 藝耕、ソウル、1995

訳注(1) 衆生の孤魂を極楽へ往生させるために行う法会の際に掛ける仏画で、主に16世紀から19世紀に製作された。その構成は、画面を三部分に分け、上段には七如来・観音菩薩・地藏菩薩などが描かれ、中段には法会の場・祭壇・餓鬼などが描かれている。そして、下端には地獄像や農作・市場・芸能などの庶民像が描かれている。つまり、下段に描かれた衆生とその変容した餓鬼が、その状態から抜け出すためには中段の法会に参加する必要がある。結局、その法会での供養によって衆生の孤魂は極楽へ往生するということである。

都市図における風俗表現の機能

金 貞我 (韓国 延世大学博物館 客員研究員 / COE共同研究員)

神奈川大学21世紀COEプログラムの研究課題の一つとして、東アジア編絵引の編纂があり、それと関連する中国の図像資料として、清代の乾隆24年(1759)に制作された徐揚筆「姑蘇繁華図」(瀋陽、遼寧省博物館所蔵)を取り上げ、検討を続けてきた。「姑蘇繁華図」は、蘇州府城の内外の景観や街並み、人々の生活の営みを迫真の筆致で描いており、18世紀における江南地方の生活文化を理解するうえで重要な資料として注目される。そして、朝鮮時代の風俗画を中心とする韓国編生活絵引の資料の中にも「姑蘇繁華図」のように、都市の風景と生活の様子を伝える都市図というべき一連の絵画資料がある。

客観的な景観の描写や豊富でかつ多様な風俗表現を特徴とする都市風俗図には一般的に記録的なイメージを求める傾向がある。実際に「姑蘇繁華図」の中には、歴史上の記録と一致する商工業に関連する老舗の看板や商号、建造物などが数多く登場するが、朝鮮時代の都市図にも歴史記録にみえる行事の様子が忠実に描かれている。確かに、極度に臨場感を高めることが期待される都市図には、他の絵画ジャンルとは異なる豊かな人間の営みがあり、その表現には迫真性を高めるべき画家の創意が散在する。

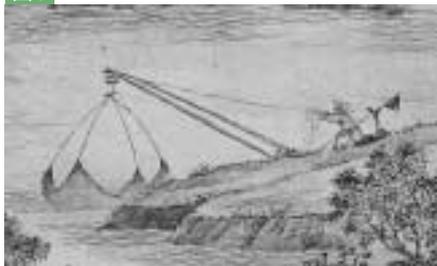
しかし、一見、現実感を増幅するような風俗表現の中には、特定の場所と結びついた行事や祭礼や耕織図、漁楽図などの伝統的な図柄、そして、ある人間の行為をもっとも説得的に表わす描写などが、「型」のように繰り返して引用されることがある。一つの例をあげると、「姑蘇繁華図」に描かれる四つ手網を引き上げる漁夫の姿は、典型的な漁楽図の図柄である(図1)。漁とその収穫を喜ぶ漁夫の生活を描いた漁楽図は、本来、自然の中で隠者の瞑想を画題としたもので、もっとも早い作例である五代南唐の趙幹作以降、持続的に絵画化された。しかし、この図様は「姑蘇繁華図」の中に風俗表現として転用され、また日本や朝鮮時代の絵画にも受け継がれている。いわば蓄積され

た図様のレパートリーが東アジアの時空を越え、風俗表現として再生される(図2~図4)。

規範性の強い耕織図や漁楽図など、明白なテーマをその裏に背負う図様が、主題を捨て、型として抜き出された風俗表現の共通点は、その「場」にふさわしい表現として活用されていることである。個々の図様は、画家の蓄積された図柄の語彙から適切に選び出され、観るものに生活の場面を表わす表現として演出される。それは、農作業の男、糸を紡ぐ女、網をかける漁夫、子供を背負う女性、荷を運ぶ男、水を汲む女など、より普遍的な生活の場面を豊かに表現する機能をもって転用される。現実を装って風俗表現の臨場感を高める演出が都市風俗図を構成する重要な要素の一つであり、その表現の裏には長い伝統をもつ図様の活用が機能していることを認識することが重要であろう。

このような表現から同時代の生活文化を読み取ることにはできるのだろうか。伝統の線上にある風俗表現が同時代の生活文化を伝えるものであるかどうかは、個々の図様が制作年代に照応するパリエーションであるという前提が重要であり、それは図様における受容と変容の過程、伝統と創造の構図の中で比較検討する作業を必要とする。

図1



清 徐揚「姑蘇繁華図」部分図
(蘇州市城建档案馆・遼寧省博物館編『姑蘇繁華図』、文物出版社、北京、1999年)

図2



五代南唐 趙幹「江行初雪図」部分図
(『故宮藏画大系一』、国立故宮博物院、台北、1993年)

図3



明 倪端「捕魚図」部分図
(『故宮藏画大系一』、国立故宮博物院、台北、1993年)

図4



朝鮮時代 伝鄭世光「川嶽」部分図
(『韓国絵画』、国立中央博物館、ソウル、1986/1977年)



屏風絵を読むにあたって 「江差桧山屏風」の読み取り体験から



田島 佳也 (神奈川大学日本常民文化研究所 教授 / COE事業推進担当者)

1 「江差桧山屏風」について

日本常民文化研究所は絵巻物から、辞書ならぬ絵引をつくるという新しい発想のもと、専門家を集め、中世の絵巻物から部分図をくり抜き、時間をかけて『絵巻物による日本常民生活絵引』(平凡社、1984年)全5巻付録索引を上梓した。COEに採択されて、新たに図像の読み解きのための試行錯誤を続けてきたが、正直、かなり困難な作業であることを切実に実感している。しかも、図像の読み解きに、未だこれといった妙案も浮かばず、往生しているのが実態である。

しかし、いつまでも往生しておられず、試行錯誤であれ、自分なりに「江差桧山屏風」(以下、「江桧図」と略称)を対象に、実際に図像を読み取ってみようと思つた。ただ、この屏風の名称は以下のように、いまだ定まった名称はない。

「江桧図」は現在、市立函館図書館が模写を所蔵している。この模写は『江差町史』(江差町、1982年)第5巻通説1の扉裏に掲載されている。そこには、小玉貞良、70歳の晩年に描いた宝暦年間(1751~63年)の「江差屏風」(宝暦年間に松前と江差で活躍した近江商人田付家の末裔、彦根市の田付欣三氏の所蔵。「江図」と略称)とともに、作者・年代とも不詳の「江差屏風とヒノキ山屏風」としてカラー印刷写真で紹介されている。6折1双の4尺屏風絵である。なお、「江差屏風」に関しては「松前江差屏風」とも、「江差松前屏風」ともいわれ、そこに「龍園齋行年七十歳筆」の落款があることから貞良70歳の作品ともいう。また、『江差町史』(江差町、1978年)資料編第2巻の「江差商人取引文書」の解題には、根拠は示されていないが、「宝暦三年(1751)に描いたといわれる」とある。

ところで、「江桧図」はすでに『新撰北海道史』(北海道、1937年)第2巻通説1に、モノクロ写真の「江差屏風」とヒノキ山からの散流しさんながを描いた写真の「檜山土場之図」が掲載されている。⁽¹⁾「江桧図」には向かって右半双に、江差前浜の柿葺きの蔵や丸小屋、賑やかな鯨漁と鯨加工やその運搬、南蛮売りなどが、左半双に江差陪山(桧山)

すなわち目名山、厚沢部畑内(羽板内)から厚沢部川に散流した伐木を鳶竿で筏下組みしている河口土場と一部河口近辺前浜での鯨加工の様子が活描されている。近年の日本史の教科書にも掲載され⁽²⁾一般に知られるようになった右半双は「江差浜鯨漁之図」とも呼ばれている。これを『新撰北海道史』掲載の写真と比較すると、屏風右上の雲の形と人、左下の鯨群来で白濁した海の描き方や雲の形が微妙に異なっている。『新撰北海道史』掲載の写真は原本を写したものに違いない。だが、いま現在、この掲載写真とネガも所在不明である。また、「江桧図」の原図も前掲『江差町史』には石川県の能登地方に所蔵されていたが、現在、その所在は不明とある。能登の歴史研究家、和嶋俊二氏のご教示によると、もともとこの屏風は珠洲市正院出身の江差草分けの商人、岸田三右衛門と同郷の素封家・西村靖治家が所蔵していたもので、大正期に家産の傾きから正院に出入りしていた富山の廻船に売られたと聞いているという。西村家は南部にも縁があったと伝えられているが、史料の散逸からその実態は不明である。ご教示の内容からいえば、この屏風は富山県のどこかに秘蔵されているか、骨董品屋を通じて海外に流出した可能性が高い。

ここでは、この「江桧図」の読み取りの中から気づいたことを1、2点縷述してみたい。

2 気づいた点その1 作成年代について

絵図を読み解く場合、その絵図に作成年代が記されている場合は良いが、記されていない場合、いつごろ描かれた絵図であるかを絞り込む必要がある。というのも、描かれた時代によって絵図の発信する情報が異なっているからである。それを正しく認識する上でも作成年代を絞り込む必要性がでてくる。皮肉にも、作成年代の絞り込みや読み解きには、描かれた地域の市町村史や探検・紀行・地誌、生業や服飾、生活史研究などの文献史資料に頼らざるを得ない。

さて、「江桧図」は年代不詳であるが、「納簾に書かれ

た屋号、手法等から見て龍園齋の描いた江差屏風よりも古く、或は其手本となったものではないか」(前掲『新撰北海道史』)ともいわれ、また屏風絵の筆致から、これも「小玉貞良初期の作であろう」(前掲『江差町史』)とも考えられている。つまり 作者を特定していないが、宝暦年間の作成になる貞良作「江図」より古く、「江図」の手本になった屏風図とする説と、小玉貞良の初期作とする説がある。どちらも貞良の作とは断定していない。

生没年が不明なこの貞良は風俗画家で、『日本画家名鑑』によれば、天和2年(1682)に松前に生まれ、宝暦元年70歳で「松前江差屏風」を描くとあり、73歳まで活躍したという。⁽³⁾あるいは松前に居住し、狩野派に絵を学んだアイヌ絵師で、龍園齋と号し、宝暦年間に活躍したという。⁽⁴⁾この貞良はほかに、「アイヌ絵」といわれる絵を多く描いている。前掲『新撰北海道史』の目次後にはそのひとつ、松前藩主に土産を奉って謁見(ウイマム)するアイヌ酋長を描いた「松前藩主蝦夷人懐柔之図」が掲げられている。これには貞享3年(1686)か、「其年号より余り遠くない頃の作であらふ」⁽⁵⁾とある。これに対して、『アイヌ絵』⁽⁶⁾の著者、越崎宗一氏は貞享3年前後では貞良は生まれていないか、幼児であり、延享元年(1744)の藩主資広時代とみるべき、としている。根拠を示していないが、恐らく越崎氏は先の貞良、天和2年生誕説に則って考証していると思われる(のちに氏は、元禄3年生誕説を主張している。⁽⁷⁾) 現在のところ、貞良の生誕年については確定できないが、先学の研究から天和2年から元禄初め(1682~92)までと推定できる。とにかく、貞良はアイヌ風俗画の先祖で、ひとつの形式を作り出した画家であるとの評価を得ている。⁽⁸⁾

それでは「江絵図」は貞良の作であるのかどうか。詳細に「江図」と比較・検討すれば、タッチは異なっているように見受けられる。貞良は工房を持っていたといわれるので、弟子たちとの共同作業であるならば異なることもそれほど問題ではない。しかし、「江絵図」が現時点で貞良作とは確定できないが、その可能性も否定しがたい。

蝦夷地と松前地に区別されていた近世北海道の松前地西部は鯨漁が村落を越えた入会漁業地であり、鯨刺網漁が盛んになったのが宝暦(1751~63)以降である。しかも、刺網漁しか公許されず、建網(大網)が江差前浜漁に公許されたのは慶応2年(1865)である。「江絵図」には建網の描写がないから、これ以前の作である。この間の期間はかなり長い。ただ、鯨漁は豊凶が激しく、安永

~文化期(1772~1817年)は薄漁・凶漁がたびたび続き、「活況」というにはほど遠かったと思われる。しかし、「鮭てふ魚は、此島のいのち」⁽⁹⁾といわれた漁業であり、当時の薄漁・凶漁の程度は測りがたく、それを絵図で明確に表現できるほどのものかどうかとも判断しにくい。どうも、絵図をみると、描かれた情景が真実を反映しているものと、ついつい見做しがちになる。絵図には過去にあったものやモチーフによって無いものまで描かれてしまうことも、またあったものが省略されてしまうこともある。もちろん、文献史資料にも著者の意図によって、あえて記されなかったり、誇張されて描写されたりしていることがある。史資料批判の難しさである。

とにかく、「江絵図」の作成年代の確定は難しい。しかし、左双の屏風が対になった屏風であることから、ここから絞り込むことも可能かと思われる。時折、許可されたり、文化4年(1807)頃、明山になったこともあったといわれるが、江差の後背地の江差・厚沢部・目名の諸松山のうち、「江絵図」に描かれた厚沢部陪山(松山)が延宝6年(1678)に伐採が漸次許可され、宝暦8年から明和7年(1758~70)にかけて全て留山になり、また文化期(1804~17)に、厚沢部川は鮭の運上漁場となり、下流域に集落が形成された⁽¹⁰⁾ことから、「江絵図」は宝暦8年以前、すなわち宝暦前期の作品と考えてよいのではないか。

また、「江絵図」には蔵町から九艘川町にかけて道沿いに並ぶ商家玄関に掛けられた暖簾が描かれている。『江差町史』資料編には、編纂者の高い見識によって商人名とともに商号や捺印された印鑑までもが丁寧に印字化されており、これで商号を調べると、宝暦期以降、江差に開いた近江商人の店が並んでいることが知りえる。ここから宝暦以降の図と考えて差し支えないであろう。

ところで「江図」には、江差九艘川の河口で弁財型船を建造している図が描かれている。「江絵図」には狭くて小さい九艘川が描かれているだけである。これが事実とすれば、弁財型船の建造は不可能である。寛政元年(1789)に江差を訪れた菅真澄も「えみしのさえき」に「九艘川といふ細ながれの川あり」⁽¹¹⁾と記している。とすれば、九艘川は宝暦末年から明和期にかけての相次ぐ大地震や津波⁽¹²⁾によって影響を受け、狭くて細い河川となったと推測される。そうであると、「江絵図」の描写は先に推測した宝暦前期とは確定し難くなる。しかし、先にも述べたように、絵図のモチーフによって省略したり、大小の書き分けをしたり、無いものを追加したりするこ



ともある。それらの事情を考慮しつつ、江差陪山の描写、商家の商号などから考えて、「江桧図」の描写は宝暦前期と考えてよいであろう。

3 気づいた点その2

右双「江差浜鮮漁之図」を読むにあたって

江差には、元文4年(1739)に坂倉源次郎(『北海随筆』¹³⁾)、天明3年(1766)に平秩東作(『東遊記』¹⁴⁾)、同6年(1786)に佐藤玄六郎(『蝦夷拾遺』¹⁵⁾)、同8年に古川古松軒(『東遊雑記』東洋文庫27 平凡社 1980年)、寛政元年(1789)に菅江真澄(『菅江真澄遊覧記』2 東洋文庫68 平凡社 1969年)、弘化3年(1846)に松浦武四郎(『校訂蝦夷日誌』2編 北海道出版企画センター、1999年)などが訪れ、それぞれ紀行文に当時の見聞を書き記している。「江桧図」の描写が宝暦前期とすると、平秩東作や菅江真澄が訪れるまでに短くても約20~25年経過している。当時の景観は極端な天変地異や急激な政治的経済的変動がなければ、それほど変わっていなかったと考えるのが自然であり、建物や景観に劇的な変化はなかったと考えてよいではないか。

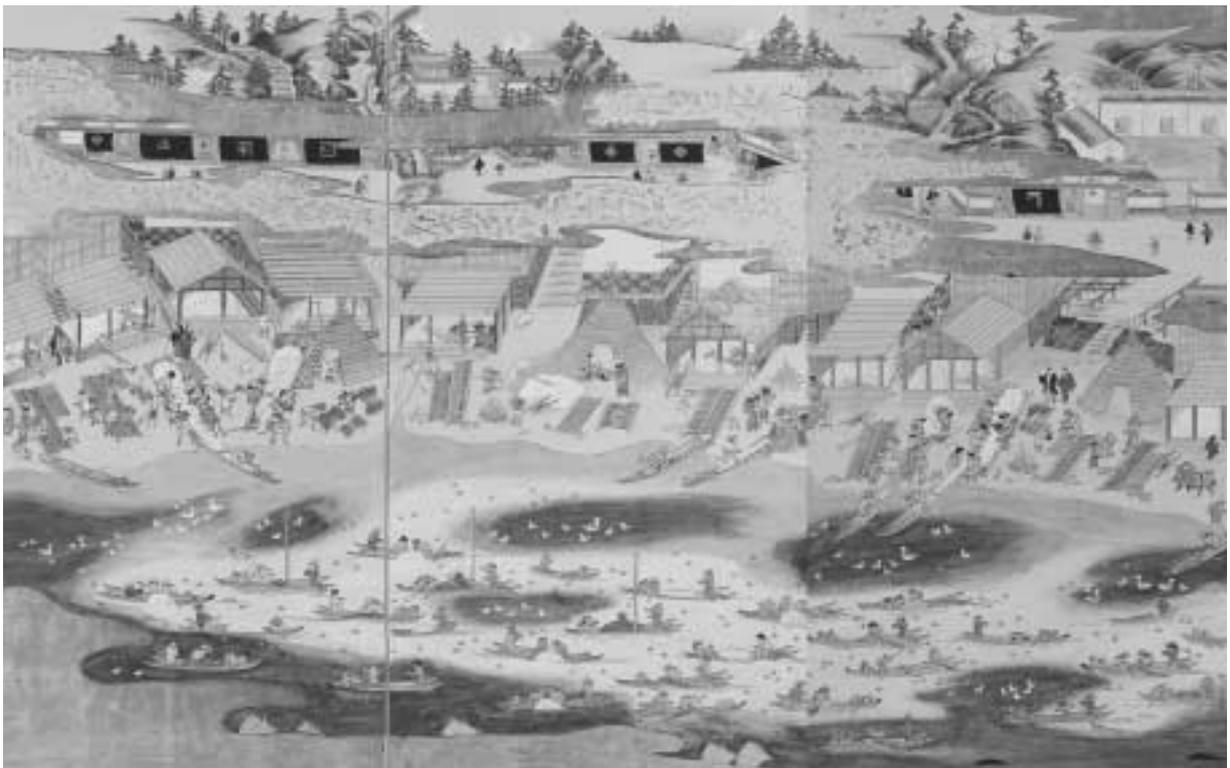
そのうえで、これらの紀行文などを参考に「江桧図」を考証していくと、絵図からは知りえない事実もわかる。たとえば、海岸の近くに板屋根に置石が置かれている商

人たちの立派な木造蔵が描かれているが、この木造蔵について『東遊雑記』には「土蔵も檜板・槓板にて包みまわして綺麗に見ゆ」とある。すなわち、「江桧図」では単なる木造蔵にしか見えないが、それが土蔵で、板で化粧回しを施した土蔵であることが文献からはじめて知りえるのである。ただ、木造蔵に見える蔵が、全部が全部、土蔵であったとは断定できないであろう。板化粧回しの蔵もあったということである。こうした点は例外としても、いうまでもないことであるが、逆に、文字説明だけからでは容易に理解しがたい情景や表現しにくい人々の仕草、道具などがリアルに表現され、理解を助けてくれるというメリットもある。また、当然、描かれてあるべきものが無い場合もある。

いずれにしても、絵図の読み取りには どのような絵図であるかにもよるが 人間の生活史全般や産業史、政治史などの専門知識が要求される。そうでなければ、絵図を容易に読み解くことは出来ないであろう。

4 気づいた点その3 模写図絵しか無い場合

「江桧図」は模写である。本来、模写は原画を「忠実」に写し取ることが要求される。しかし、実際は模写をする絵師の意図・感情が投入されて、時にはところどころ原画に照らして詳細に比較すると、微妙に異なる場合が



見受けられる。先にも触れたが「江絵図」の原画は不明である。模写の「江絵図」で検討するしかないが、鯨漁に携わる漁民たちの描かれた服装や被り物を詳細にみると、かなり現代的な被り物も散見される。しかも数種類描かれており、それらが当時からあったものかどうかも確認しがたく、疑問に思われるものも多い。絵師の創意・創作が感じられるのである。そうしたなかで、松前蝦夷地を対象にした、幕末江戸風俗事典『守貞謾稿』(東京堂出版、1992年)などのような参考にするべき事典があれば心強いが、無い。唯一、参考になると思われるのが、天明8年～寛政元年の比良野貞彦「奥民図彙」⁽¹⁶⁾などに描かれた東北の民衆の服装や道具などである。絵引を作成する場合、それを時代に則して、どう呼ばれていたのか、あるいはそれを表現する語彙をどうするか、という問題も起きる。たとえば、被り物などを詳細に検討すると、いろいろな被り物が描かれているが、解説する典拠となる事典類がほとんどない。

何を参考に「江絵図」を、否「絵図」を読み解けばよいのか。ぼやきになるが、「絵図」の読み解きにはいつもこうした問題が立ち足る。関連文献の博搜が「絵図」の読み解きの鍵になる。

注

- (1) 北海道 1937年 160～161頁の挿入図、181頁。ただし、『新撰北海道史』第2巻通説1掲載の「松山土場之図」は一部だけの掲載で、河口付近の海岸における鯨加工の情景がカットされている。
- (2) たとえば、『詳解 日本史B』三省堂 1994年 152頁。『日本史B』東京書籍 2003年 201頁。
- (3) 『松前町史』通説編第1巻上 松前町1984年 999～1000頁。
- (4) 五十嵐聡美『アイヌ絵巻探訪』北海道新聞社、2000年 64～68、161～163頁
- (5) 前掲『新撰北海道史』第2巻通説1 目次36頁の付録
- (6) 越崎宗一『アイヌ絵』北海道出版企画センター、1976年再版 101頁
- (7) 前掲『アイヌ絵巻探訪』162頁
- (8) 泉靖一編『アイヌの世界』鹿島研究所出版会 1968年 152頁
- (9) 菅江真澄「えみしのさえき」『菅江真澄全集』第2巻 未来社 20頁
- (10) 『江差町史』第5巻通説1 江差町 1982年 224、386～388頁
- (11) 前掲「えみしのさえき」『菅江真澄全集』第2巻 未来社 28頁
- (12) 「江差町史年表」『江差町史』第6巻通説2 別冊 江差町 17～35頁
- (13) 『日本庶民生活史料集成』4巻 三一書房 1969年
- (14) (13)と同じ
- (15) 大友喜作編『北門叢書』第1冊 国書刊行会 1972年
- (16) 前掲『日本庶民生活史料集成』第10巻 1970年

「江差浜鯨漁之図」(「江差松山屏風」右双)

18世紀中ごろ鯨群来(クキ)に湧立つ江差(北海道松山郡江差町)前浜の鯨差(刺)網漁の情景。背景には鯨場への仕込み、あるいは鯨製品を扱う近江商人店(「丙浜組」)が軒を連ねている。





なぜ「道具」ではなく「民具」なのか

河野 通明 (神奈川大学日本常民文化研究所 教授 / COE事業推進担当者)

1 なぜ道具ではいけないの？

昨年11月の国際シンポジウムの際、「民具と民俗技術」というタイトルを掲げたが、その準備段階で「なぜ民具というのか。道具ではいけないのか」と問いただされる場面がしばしばあった。わたしは日本民具学会の会員であり、神奈川大学日本常民文化研究所の所員としては『民具マンスリー』の編集も担当しているが、あらためて民具とは何かを自ら問い直す必要に迫られたのである。

もとはといえば、わたしは民具という言葉はさほど好きではなかった。民具の「民」という字に柳宗悦流の民芸のにおいが感じられて、科学的歴史学を標榜してきた者にとっては肌が合わなかったからである。にもかかわらず民具学会に入会したのは、会に入れば博物館関係者と知り合いになれて収蔵庫が見せてもらえるという、まったく実利的な理由からであった。それから20数年、気が付いてみれば機会あるごとに民具の大切さを訴えている自分がある。その理由は何なのか。

まず民具という言葉は便利である。博物館・資料館で「民具を見せてください」といえば通じるし、講演会での「民具は住民遺産、みんなで守りましょう」という訴えも聴衆に通じる。だがこれだけでは「なぜ道具ではいけないのか」と問いかげには耐えられない。そこであらためていま自分はなぜ民具と呼んでいるのかを整理してみた。

2 機能情報と付帯情報

一例をあげよう。図1は葛飾区郷土と天文の博物館の犁からすきである。道具は使うものだから用途に適合した形をもっており、形を見れば使い途はだいたい見当が付く。たとえば金槌を見れば釘を打つ道具だと分かるし、傘をみれば雨の日に広げてさすものだと分かる。同様にこの写真をみれば年配の人なら牛馬に引かせて田畑を耕す道具と理解できよう。この形の発している“この道具は何に使ったものか”という情報を「機能情報」と呼んでおこう。だがこの犁の形態は、機能情報以外にも次のような重要な情報を発信している。

まず馬に向かって伸びる犁りえんは上方に反っているが、これは乾燥による歪みと考えられ、もとは直棒であろう。直棒犁は朝鮮系無床犁の要素である。それに対して長い犁床は中国系、つまりこの犁は朝鮮系と中国系の混血型である。朝鮮系要素はこの地域か近辺に朝鮮系渡来人によって無床犁が持ち込まれた事実があったことを示しているが、中国人については大挙して日本に渡来したという歴史は知られていない。なのになぜ中国犁との混血が起こったのか。

3 大化改新政府に殖産興業政策があった

これまでの犁・馬銚・首木・鞍の広域調査から得られた結論を総合すれば、⁽¹⁾⁽²⁾大化改新政府が遣唐使を通じて唐の長床犁を入手し、それを日本の実情にあわせて改良した政府モデル犁をつくって全国の評督こほりのかみ(のちの郡司)あてに流したらしい。設計図で技術伝達のできる時代ではないので、実物模型を500~600ほど作って全国に送ったと考えられる。この政府モデル犁にもとづくコピーと考えられる7世紀中葉の犁が兵庫県梶原遺跡や香川県下川津遺跡から出土しており、それをもとにして作った政府モデル犁の復原図が図2である。

この犁はアジアでも特異な一木造りの犁へらを備えている。犁へらはアジアでは中国でも朝鮮半島でも鉄製、それも鋳造品であるが、鉄資源の不足した日本では、鉄製犁へらでは地方への普及は無理とみて、木製犁へらモデルを作ったのであろう。また犁先は鍛造V字形犁先が付けられているが、これもアジアでは特異なもので、アジアで一般的な鋳造犁先は地方で生産するのは無理とみて、当時普及しはじめていたU字形銚先をアレンジした鍛造V字形犁先に変更したものと考えられる。

4 犁は変わらないのが当たり前

これまで農具はその土地の地形や土質にあわせて少しずつ変化してきたのだと信じられてきた。ところが犁のような外来の農具を手がかりに検討していくと、形の違

いは朝鮮系か政府モデル系か、あるいは両者の混血かで基本的には決まってしまうのであり、現在見る形は風土に適応した結果などではなく、その地に朝鮮系渡来人が来たか来なかったか、渡来人の出身地はどこかなどという歴史的事情によって規定されていることが明らかになってきた。したがって犁の形の違いは、その地域の古代史を解く手がかりとなるのである。

5 混血の要素を解析

そこで葛飾の犁に戻ると、直棒犁轅は朝鮮系で、長い犁床と犁頭の盛り上がりは政府モデル犁の一木犁への痕跡で、上部を丸い板で補っているのは、一木犁への上部が割れて欠け落ちたため板で補って補修した跡であり、それが更新の際にも継承され定型化したものと考えられる。また左反転方式も柄の末端の把手の形状も政府モデル犁からの継承である。つまり葛飾の犁は7世紀後半の中大兄 = 天智政権がおこなった長床犁導入政策が、間違いなく関東にまで及んでいたことを示している。

6 東アジアの激動が犁型に刻印される

民具のなかでも犁はもっとも変化しにくい部類のようで、隣村でたとえすぐれた形のもが使われていても容易に影響されず、先祖伝来の形を墨守して20世紀に及んでいる例が多々見られる。この保守性の強い犁に混血が起こっていることからすれば、政府モデル犁の普及にはかなりの強制力がかかっていたと想定される。

7世紀の東アジアは唐帝国の周辺諸国への侵略を軸として展開した激動の時代であり、唐からの長床犁導入政策は、中大兄 = 天智政権による富国強兵策の一環をなしていたようである。その状況下で伝統的な権威に依りかかってきた各地の旧国造勢力 = 評督も安閑くのみやつことしてはいられなくなった。律令制に向かってひた走る新体制に乗り遅れまいと、一族の存亡をかけて政府モデル犁の普及に奔走していたのかも知れない。葛飾の混血型犁は、そうした7世紀後半のアジアの激動の地域での展開の産物と考えられる。そして同様の混血型犁は、九州から関東までの各地で、多様なバラエティーで検出されてきている。

7 附帯情報が重要 だから「民具」

以上に見たように、民具の形には機能情報のほかにその民具がたどってきた歴史、言いかえればその地に生きてきた人々の古代以来の歴史情報がおどろくほど豊かに保存されている。ある人が葛飾の犁を「道具」と呼ぶ場



図1 葛飾の犁（葛飾区郷土と天文の博物館）

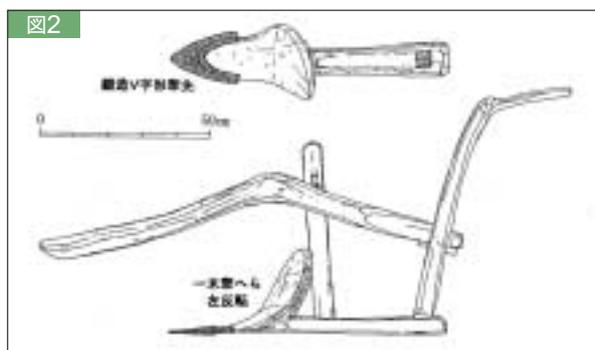


図2 政府モデル犁の復原図（注2）河野2004）

合は、機能情報以外の附帯情報には関心がないことを表明している。農業技術史を追っているわたしは機能情報にはもちろん重視するが、それ以上に附帯情報にも強い関心を向けている。この立場からは、葛飾の犁は単なる「道具」ではなく「民具」なのである。

8 民具という非文字資料の体系化

民具が附帯情報として豊かな歴史民俗情報を保有しているなら、民具こそ非文字資料の代表格であり、その体系化を通して文字資料には記録されなかった歴史が復原できる。『古事記』や『日本書紀』は都の天皇・貴族の政治・外交情報しか記録していないが、各地に残る民具からは、それぞれの地域の庶民のアジアに連動する古代史が復原でき、日中韓の合同調査を実施すれば、東アジア規模での民族移動をともしなう激動の庶民史が復原できよう。そのためまず日本で「民具からの歴史学」の方法論を確立しようと、各地の資料館の民具調査を続けている。

80年前、渋沢敬三は物証から庶民の歴史をたどろうと民具研究の登山口に入った。その渋沢が夢に描いた頂上の姿が、いま行く手に姿をあらわし始めたのである。

注

- (1) 河野通明「民具の犁調査にもとづく大化改新政府の長床犁導入政策の復原」『ヒストリア』188号、2004年
- (2) 河野通明「7世紀出土一木犁へら長床犁についての総合的考察」『商経論叢』40巻2号、2004年



韓国を少し知るヒント 自転車とオートバイ



樫村 賢二 (COE研究員・PD)

日本と韓国の違いを述べるなら様々な事例を挙げる
ことができる。私はその違いを示す日本でも韓国でもあり
ふれたモノに注目している。自転車とオートバイである。

自転車が少ない

韓国において自転車を使用する人は少ない。安価な(約
90円)地下鉄や路線バスがあり、バスはソウル市内をく
まなく走っているし、タクシーも安く使いやすい。だが、
そもそもソウル市内の道は自転車通行をはじめから想定
していない。段差が多く、歩道、横断歩道が少ない。階
段のみの地下道が発達しているため自転車では移動しに
くい。地下道が多いのは交通量が多く、道幅が広いせい
もあるが、北朝鮮との境界から近いソウル市では地下
道がいざという時の待避所になっているのである。

ソウル市内で自転車をよく見かけるのは漢江沿いの公
園で親子または恋人同士でサイクリングをする様子であ
る。自転車は有酸素運動になるといって健康のために乗
る人や観光地などで乗るなどレジャーの遊具的存在であ
り、「冬のソナタ」で主人公たちが観光地である南怡島で
自転車に乗るデートシーンがそれを示している。

ただし急激な経済成長のため都市部に集中した人々の
住宅安定供給のために行政主導で造成された新都市、高
陽市一山、城南市盆唐、または政府第二庁舎がある果川
市などは環境汚染の心配が無く、渋滞などの問題と無縁
の自転車の利用促進を行政が積極的にアピールしており、
駐輪場を設置し自転車専用レーンを設けている。こうい
った場所では他所よりも自転車が普及しているが日本の
ように老若男女が自転車に乗るということは少なく、女
性が自転車に乗ることはさらに少ない。そのため韓国の
の自転車といえばMTB風のスポーツタイプが主流であ
り、日本のいわゆる「ママチャリ」はあまり見かけない。

韓国人の友人によれば韓国人の感覚からすれば自転車
は下品なイメージがあり、女性が乗るべきものではない
とされ、韓国の大学に勤める日本人教師が自転車で通勤
したところ、教師が自転車のようなものでの通勤はやめ

たほうがいいと諷められたということも聞いたことがあ
る。これを韓国人の両班意識からとする説明をよく聞く
が、年配の韓国人に聞くと自転車は物を運ぶものという
イメージがあり、自転車に乗るということは考えられな
いという(写真1)。これも肉体労働や商売を蔑視する韓
国特有の儒教の考え方によるものである。

道具としてのオートバイ

自転車は物を運ぶ道具と認識されるが、オートバイは
現在、ソウル市内運送の主役である(写真2)。ソウル市
内でオートバイは日本であれば明らかに違法であるくら
いの大きな荷物を積んで走っている。違法どころかも
とバランスの悪いオートバイに危険なくらいに荷物を
積み上げ、両脇に荷物が大きくはみ出ている。これらの
オートバイは燃料店がプロパンガスや灯油を運んだり、
ガラス店がガラスを運んだりと専門店が自ら配達にオー
トバイを利用している場合もあるが、大半は専門の配達
業者で韓国人は「クイックサービス」と呼んでいる。も
ちろん日本のように自動車による宅配業者や郵便小包も
存在するが、慢性的に道路が渋滞するソウル市内にあっ
ては渋滞をすり抜け、ソウル市内や近郊までは原則当日、
数十分で書類、物品を届けるクイックサービスは人々の
生活に欠かせないものとなっている。

このクイックサービスは先ほども述べたとおり、とんで
もない大きさや量の物品を運ぶが、そのために工夫され
た荷台が取り付けられている場合が多い。この荷台の形
状は韓国の伝統的運搬具の一つである背負子「チゲ(지
개)」とほぼ同じ形状であることは早くから気になってい
た(写真3)。背板部分、そして荷物を支え安定させる部
分、そして大きな荷物を積載し不安定なバイクを駐車す
るときに用いる棒(杖)はチゲの付属備品として欠かせ
ないものである(写真4)。現代のオートバイに韓国の伝
統的な運搬具であるチゲが融合、継承され活躍している
姿は古い韓国の絵図に描かれ市場の写真に写っている行
商人や運搬夫の姿に重なるものがある。

韓国人である知人は「オートバイ・アジョシ」(オートバイおじさんの意)は信号も守らないし、逆走し、歩道などもオートバイで走り回り危険だが、危険な交通のなかを安く早く何でも運んでくれる庶民の味方という認識、また多少哀れむような気持ちがあり、警察を含めた社会全体が多少の違法性なども大目に見ているという。

もし趣味のオートバイであればこのように大目に見るということではなく、社会の風当たりも強いであろうが、クイックサービスが物流に欠かせないもの庶民の味方と認識されていることと、かつかつての行商人や運搬夫が使用したチゲの姿を継承していることが関係があるのではなかろうか。

オートバイ・自転車以前 チゲクンと襍負商

朝鮮時代、朝鮮半島の商業は市場を中心に襍負商^{ボブサン}とよばれる行商人によって成り立っていた。襍負商は負襍商ともいい、朝鮮時代に郷市、すなわち地方の定期市場を中心に行商しながら生産者と消費者の間で経済的な交換を媒介とした専門的な市場商人である。襍負商とは「襍商」と「負商」をあわせた総称であり、市場の実権を掌握していた。襍商は金銀・毛織物・化粧品・呉服・などを風呂敷に包んで歩くところから襍商と呼ばれ、負商は概して木製品・竹製品・鉄器・陶器などを扱う行商人でチゲを用いて商品を背負うことから負商と呼ばれた。これらの襍負商は、互いに連絡を保ち、助け合いながら市場における商権を確保した。

韓国には負商との類似した「チゲクン(지개꾼)」という人々がいる(写真5)チゲは背負子、クン(꾼)は「~する人」の意で、チゲで荷運び商いと示す。このチゲクンは現在もソウル市南大門市場などで活躍しており、市場での運搬に寄与している。かつては山から都市部まで燃料の木

を運ぶナムクン(나무꾼)などもいた。

チゲは現在も農村部では普通の道具として用いられており、民芸品店などでは小さなチゲの模型がお土産として売られており、また物産展などでインテリアとして用いられるなど韓国人にとって郷愁を誘うものとされている。

一つの仮説

私としては韓国社会において運搬形態がチゲクン(負商)自転車の荷運びクイックサービスという移行があったと想定している。それは単なる運送形態の移行ではなく、人々の彼らへの認識、社会的地位なども継承してきているということである。チゲクン、クイックサービスは社会的地位が低く過酷な労働する人々という哀れみを含んだ同情と支持が混在する感情で見守られている。そしてチゲクンから推移をシンボル的に示すのが、運搬用の自転車、オートバイに継承されているチゲの構造、外観をもつ荷台である。チゲの構造、外観をもつ荷台に大量、大きな荷物を積載するシルエットが郷愁を誘うかつてのチゲクン、負商と重なり合うことで違法、危険であっても人々が許容することになっている。そのような仮説をもち、韓国のオートバイと自転車に注目している。

写真1



自転車による配達

写真2



ソウルを疾走するオートバイ

写真3



チゲクンのチゲ

写真4



停車するオートバイ

写真5



南大門市場のチゲクン



むらの風景が語るもの 世界遺産白川郷を訪ねて

藤永 豪 (COE研究員・PD)

一昨年秋、私は岐阜県白川郷を訪ねた。いわずと知れた合掌造りの家々が集まった世界文化遺産である。茅葺の切妻屋根を冠した大きな民家や納屋、それらが集まった集落景観は実に見事である(写真1)。訪れた多くの人々が、さすがは世界遺産!、と感動するのもうなずける。私も遅ればせながらその感動した1人だ。しかし、その後、目を引かれたのは、集落の中を歩き回る大勢の旅行者の姿であった。もちろん、世界遺産ともなれば、全国的に注目を集め、観光地として発展していくのは当然であろう。実際、集落の脇には立派な駐車場が設置され、マイカーや大型バスに乗った観光客がひっきりなしにやってくる。土産物屋や食堂も大変な賑わいである。しかしながら、集落の中の曲がりくねった細道を練り歩き、家々の軒先を覗き込み、あちらこちらで写真を撮っている彼らの様子を見ると、なにやら不思議な感覚にとらわれる(写真2)。なぜだろうと考えた。そこでふと気付いたのが、地元の人々の姿がほとんど見えないということであった。確かに立派な合掌造りの家々が存在感を持って立っているのだが、そこに生活しているはずのむら人の気配が感じられないのだ。私の違和感の正体はこれであった。無理もない。一歩わが家の玄関を出るとそこにはたくさんの見知らぬ人間がいるのだから。私も集落の

中を歩き回ったが、その途中、裏庭でこっそりと洗濯物を干している女性と目が合った。彼女は次の瞬間には残りの洗濯物を抱えて、いそいそと家の中に隠れてしまった。今日の前に広がる空間は旅行者のものなのだ。しかも、極端にいえば、彼らは合掌造りの民家しか見ていない。もちろん、何をもって、白川郷が世界遺産として登録されたのか、観光の目的は何か、ということを考えれば、合掌造り以外のものにカメラのレンズを向ける必要はないし、私自身何ら疑問はない。

では、むら人たちが生活の場としてきた空間はどこにいったしまったのか。先ほど述べたように家々の裏手には洗濯物がひらめいており、水田には稲刈りの跡と稲干しが見られ、ほんのわずかだが日常の一端が窺えた。そんな集落の人々の動きを目の当たりにしたのは、朝と夕方であった。私は朝早く起き出し、集落の中を回った。早朝6時頃だったが、バインダーの音を響かせ、数人の老人たちがせせせと稲刈りにいそしんでいた。また、集落の外に勤める若いむら人たちが家用車に乗り込み出かけていた。一方、夕方5時過ぎには、観光客のほとんどが姿を消し、下校途中の小中学生や夕飯の材料の買い物帰りなのか、路上で談笑する女性たちの姿が見られるようになった(写真3)。家々の窓には明かりが灯り、数軒の

写真1



合掌造りの家々が建ち並ぶ白川郷

写真2



集落内を散策する観光客

家では未だに薪で風呂を沸かすのか、煙突から白い煙が流れていた。あれほど観光客でごった返していた集落はうのように静かになり、ようやくむら人の手の元に生活空間が返ってきたかのようである。昼間は見ることのできなかつた確かなむら人の生活風景がそこにあった。

このような、ある意味対極的な二つの顔を見せる集落の風景は、われわれに何を示しているのだろうか。むらの風景と空間はまぎれもなく人々が長い生活の歴史の中で築き上げてきた文化の結晶であり、痕跡である。あそこの田んぼはどこそこのじいさんが拓いたとか、あの木は誰が植えたとか、せっかく拓いた田んぼも減反で放棄されてしまったとか、一部の屋根は外から買って来た茅で葺き替えているとか、むらの風景と空間は、住民生活のその時その時の状況を映し出しながら移り変わってきた。そして、今度は観光という波である。世界遺産というブランドに支えられた商品としての風景と空間の提供…。私は決して悪い意味でこのことを捉えているわけではない。言いたいことは、そこに生活してきたむら人が生きるために、おらがむらと暮らしを守るために必死に考えぬき、行動を起こしてきた事実にも目を向けなければならないということである。だからこそ、むら人が集落の中で活動を見せる朝夕と観光客で賑わう昼間の風景のギャップを考えなくてはならない。どちらも真のむらの姿である。過疎化が進み、社会基盤の弱体化が進む現在において、むらの未来を切り開いていくためには、自分たちのむらの文化を商品として、付加価値を付けて外部の人間に提供するのも1つの手段である。駐車場を作り、舗装された遊歩道を整備し、旅行者を呼び込む。同時に、世界遺産に登録したこととその目的からいっても、人類の文化としてのむらの景観を守り、また公開し、世の人々

にその存在意義と価値を問うてもいかねばならない(もちろん、そこにはむら人の誇りも存在するであろう)その結果として、観光という都市の論理が、これまで自分たちだけの空間だったむらの中に入り込んでくるのはやむをえない。しかしながら、自分たちの生活が外部の人間によって支えられている部分があるとしても、すべてを晒すのはおかしい。そんなジレンマがこの集落には見え隠れする(写真4)。観光客の一部には、原風景という言葉を丸飲みしたまま、あたかもそこが最近作られた新しいテーマパークであるかのような錯覚を持ち、そこが実際の生活の場であり、現在も生きるための切実な場でもあることに気づかない者もいる。合掌造りの家にも、当然ながらテレビも冷蔵庫も洗濯機もあり、現在の日本ではどこでも見られる生活が営まれている。軒下には茶色に塗られたパラボナアンテナも付けられている。そして、その生活はわが国の他の農山村と同様に、大半は農林業以外の就業によって支えられている。風景と空間をめぐる旅行者のノスタルジックなまなざしと生活者のリアルな視座、そして、むらを守るための外部への開放と自己保全、これらがせめぎあい、それらが錯綜しながら現在のむらを作り上げている。さらに、そこにはユネスコや行政による遺産の管理・維持という枠組みも覆いかぶさっている。また、観光客が出入りする土産物店や食堂の経営者や従業員にも外部からやって来た人々がいる。実に様々な属性の人間がこの地域と関わっている。

われわれが記録しようとしているのは、このような多様な人々の必死で切実な願いと思いが地表に刻み込まれたむらの風景なのであり、生活にもとづくむらの全体像なのである。

写真3



下校途中の小学生

写真4



玄関先の貼り紙



海外 博物館 事情

ブラジル



歴史変遷の象徴

サンパウロ市の2つのミュージアム

菊池 渡 (サンパウロ大学日本語日本文学コース助教授)

はじめに

ヨーロッパ先進諸国におけるミュージアム建設は国家形成、社会の近代化と深い関りをもっている。ブラジルはそのプロセスと密接な関係をもつアメリカ大陸植民地化の産物である。その主要都市サンパウロにおけるミュージアム建設はどのような性格を持ち、歴史的にはどのように考察できるのだろうか。

サンパウロ市は452年の歴史を誇り、南アメリカで最も古い都市の一つであるとともに、人口1,040万人の大都市である。ミュージアムも全部で35あるが、敢えて二つ選ぶなら、ここで紹介するサンパウロ大学パウリスタ(イピランガ)博物館とアシス・シャトーブリアン・サンパウロ美術館になる。以下、収蔵品を紹介しながら建設の歴史にスポットを当てて簡略に述べる。

1 サンパウロ大学パウリスタ博物館

イピランガ博物館の名称でも知られるサンパウロ大学パウリスタ博物館(以下パウリスタ博物館)は1895年に開館された、サンパウロで最も古い博物館である。

設計者はイタリア人のトマス・ガウデンツォ・ベッチで、1822年9月7日にポルトガル皇太子ドン・ペドロがブラジルの独立宣言をしたイピランガ丘陵に独立記念モニュメントとして、1885年から90年まで5年を費やして建てられた。前面にはベルサイユ宮殿を模した庭園が広がり、通りを一つ隔てた先には独立宣言に際して「独立か死か」と叫んだとされるドン・ペドロの像を含む131体のブロンズ像からなるイピランガ独立記念像が見える。同博物館は1963年にサンパウロ大学付属博物館になり、現在に至っている。(写真1)

パウリスタ博物館では肖像画、文献なども含めて12万5千点を超える所蔵品を常時展示している。年代的には最古が17世紀のものから、19世紀末から20世紀半ばまでを主たる対象としている。

パウリスタ博物館の建物は地上2階、地下1階で構成されている。1階の廊下には19世紀末の口バ引きの消防車、

衛生局の消毒剤運搬車などが展示されており、間近で観賞できるようになっている。

2階の各展示コーナーには椅子や筆筒、ベッドなどの家具、食器、ミシンなどの家庭必需品から拳銃、鉄砲、サーベルなどが展示され、19世紀末から20世紀にかけての市民、主に上流階級の暮らしぶりが見て取れる。

地下には陶磁器、蝋燭立てなどの照明器具、インテリアデザインのコーナーのほかに当時の有力者の肖像画、風景画、また宗教的モチーフ、庶民の生活などを描いた油絵、水彩画の展示コーナーがある。

パウリスタ博物館は20年代前半まで自然史博物館とされていた。しかし、1927年には植物学セクションが生物農業保護センターに、1939年には動物学セクションがパウリスタ博物館と同敷地内にあるサンパウロ大学動物学博物館に、そして1989年には考古学、民族学セクションがサンパウロ大学キャンパス内に考古・民族学博物館としてそれぞれ移転され、別個の博物館として独立させられたことは特筆されるべきであろう。それは歴史博物館として確立させることにより、パウリスタ博物館をサンパウロの政治・歴史的重要性の象徴にしようとする地元政治家の思惑による。それについての詳細は後述する。

2 アシス・シャトーブリアン・サンパウロ美術館

通称MASP(Museu de Arte de São Paulo、サンパウロ美術館の略)の名で親しまれているこの美術館は1947年10月2日にジャリオス・アソシアードス新聞社オーナーで当時のマス・メディア王と言われたアシス・シャトーブリアンとジャーナリストであり、かつ芸術評論家でもあったイタリア人ピエトロ・マリア・バルジによって創設されたが、現所在地パウリスタ大通りに移転したのは1968年のことである。それまではジャリオス本社ビルの全4階を改造して使用していた。ブラジルに西洋先進国に匹敵する近代的美術館を建設するのが当初からの目的であった。

南米一のビジネス街パウリスタ大通りビル群の中で、

ひときわ目立つ設計の建物がMASPである（写真2）。2階のガラス張りの建物が4本の赤い柱によって支えられ、まるで宙に浮いているかのような設計は通行者側から見る都心の景観が遮られないようにとの設計者リナ・ポ・バルジの工夫だったと言われている。

MASPは絵画、彫刻、写真など千点を超える作品を収蔵し、交代で展示している。コレクションの中で主要なのは中世以降の西洋絵画で、13世紀のピガロの作品がもっとも古く、一番数多いのはフランス印象派のルノアールを筆頭にマネ、セザンヌ、モネ、ロートレックなどの作品である。他にもゴッホ、ピカソやイタリアのラファエル、ボッチチェリ、スペインのグレコ、ゴヤ、そしてドイツ、オランダ、イギリス、メキシコなどの作品を収蔵している。

ブラジル人画家ではセガール、ジ・カバルカンチ、ポルチナリなどが代表的であるが、訪問時にはほとんど展示されておらず、片隅に追いやられている感が否めなかった。

シャトーブリアンは当初、当時の首都リオ・デ・ジャネイロ市に博物館を建設する意向だったといわれている。しかし、個人コレクションを代表的な美術館規模に発展させていくためには相応の寄付が必要で、すでに衰退しつつあったリオよりも資産家の多いサンパウロの方が有利との見解によって最終的に決定が下された。沿革にはジアリオ社の重役で後の館長エドムンド・モンテイロの尽力が大きかったと記されている。財・政界との太いパイプラインを活用して今日のMASPを築いたのである。

おわりに

博物館はコレクション（収集）とエキジビション（展示）の二つの行為が一体化したシステムであるが、ヨーロッパにおいては、王侯や貴族、そして植民地の宗主としての国家が権力を誇示するためのものであったと梅棹忠夫（2000）は言っている。

そのような観点からパウリスタ博物館を捉えるなら、初期の主旨は独立記念モニュメントとして独立国家の権威を知らしめることにあったと言える。1889年の共和国制導入につながる一連の運動はサンパウロの共和党を中心としたものだった。後に博物館として開館した経緯をたどると、サンパウロの政治勢力が新体制において存在感を示す手段の一つとしたところにある（ALVES、2001）。サンパウロにおけるパウリスタ博物館の充実により、旧立憲君主制を象徴するミュージアムのある首都リオ・デ・

ジャネイロに対抗する意図があったのである。

一方、MASPは規模の違いはあれ、エキジビションにおいて先進国に比肩することで同等のステータスを得ようという一実業家の意図で実現した。その建設には先進国を手本にブラジルの近代化を図ろうとするエリートの見解が反映している。しかし、なによりもMASPがサンパウロに建設されたことに深い意味合いがある。共和国制移行で政治的に台頭を表したサンパウロは経済的にもブラジルの中枢として揺るぎない地位を確立しつつあった。MASP建設はそういう時代の動向を象徴していると言える。

サンパウロの2つミュージアムは梅棹説の「文明の記憶装置」として古き時代の遺産を保存するとともに、歴史変遷、時代転換の象徴とも位置付けられるのである。

写真1



サンパウロ大学パウリスタ博物館

写真2



アシス・シャトーブリアン・サンパウロ美術館

引用文献

- 梅棹忠夫著『近代世界における日本文明 比較文明学序説』
中央公論新社、2000年
ALVES, Ana Maria de Alencar. *O Ipiranga Apropriado*.
São Paulo, Humanitas FFLCH / USP, 2001



日・中の民間芸能の比較 伝統の異なる変遷

岳 永逸（北京師範大学民俗学与文化人類学研究所教員）

はじめに

2005年7月15日～28日、筆者は神奈川大学21世紀COEプログラムの招聘により、海外若手研究員として日本で訪問研究を行った。

私の研究は主に民間芸人、民間信仰及び民俗誌、特に近現代の都市における街頭芸人と現代の華北における村の祭りに関するものである。中国社会の現代化プロセスと経済発展に伴い、これらは主に食品産業経済から発生し、農耕文明と一体となった民俗現象に変化をもたらした。例えば、20世紀前半の北京天橋、天津三不管（訳注：誰も管理していないことからこう呼ばれた）南京孔子廟、開封相国寺などといった都市における「雑吧地」（様々な職業の人が集まる場所）は、完全に姿を消した。もし、今日まで残っていたとしても、かつて「雑吧地」で行われた露天芸能はすでに舞台やカメラによって異化してしまっただろう。同じ空間で観衆と向き合う相互活動や交流、そして本能的に生み出され、芸人のインスピレーションをかき立てる即興と民間芸能が有した素朴さ、野性味そして生命力は失われてしまった。⁽¹⁾ 広大な農村において、かつてはこぞって表現され、演じられた民間文化の神仏を祭ることを原点及び核心とする祭祀にも、主だった言葉の統一化や目先の経済利益という動きの下で変化が生じている。農村社会には人々の需要を満足させ、心理的に人々の生存危機を解決するという本土信仰は未だに主だった言葉によって愚昧や迷信、非合理的だと決め付けられ非難されている。⁽²⁾

中国の民間文化

これらの現状と矛盾するのは、経済力の成長に伴い、今日、文化の保護と発展に関心を抱く余裕がでてきた政府が、まず保護し、発展させたのは、政府の意志を代表するそれぞれの人が決して完全には認知していない「民間文化」だった。これは今日の政府の発表に頻りに表れる民間文化遺産を再び民間文化自体から遠ざけ、美しい表看板となった。個人或いは団体の参加、政府主導によって申請された民間文化遺産運動も事実上は名利を争奪し、私利をむさぼる目隠しとなった。このような状況下において、かつて都市の「雑吧地」で行われた演技やなお健在な老芸人、農村における龍、伏羲、女媧などと現代国家の神話的記号をスムーズに結びつけた祭りは、人々

に尊重されるか、そうでなければ比較的豊かな存在背景を持った。

物質文明が高度に発達した日本と比較すると、中国は依然、地域発展が不均衡な発展途上国である。中国に既存する研究に鑑みて、私は中国と多くの文化的淵源を共にする日本の民俗文化の現状及び伝承者のアイデンティティに関心を抱いた。そのため、私は今回、主に日本の都市と農村における集団性祭祀活動の現状、落語などの伝統的民間芸能及び芸人の知識伝承と認知をテーマに研究を行った。

日本の祭祀と民間芸能

今回の訪問研究では主に日本の昨今の集団性祭祀活動について観察を行った。私は、7月20日、21日、27日、静岡県熱海市網代の阿治古神社例大祭、埼玉県熊谷市団扇祭り、神奈川県真鶴町の貴船祭りを参観した。これらの祭祀は、程度は異なるが一様に無形文化財である。これらの祭祀活動は現地の人を総動員して行われた。政治要人、財団、個人は次々と寄付をし、警察は秩序を守り、中壮年が神輿を担ぎ、小中学生は笛や太鼓を持ち、あるいは大人たちの真似をし、神輿を引っ張り、街を練り歩いた。団扇祭りでは、発達した科学技術、物質的生活と伝統的な祭祀との間に対立を感じることはなかった。「見者有縁、人人参与」（見たものには縁があり、みなに参加する）という集団の協力精神を感じ、文化的伝統を有するという誇りと喜び、そして一糸乱れぬ演技を見た。文化は文化である。「文化搭台、経済唱戲」（文化が台を築き、経済が芝居をする）という文化をまるで経済の随従や召使であるかのように軽視する政策にその力を振るう余地はない。文化的伝統としての祭祀自体は社会的尊重と保護を受けている。

中国の単口相声に似た落語の伝承は比較的良好な保護を受けている。これは業界内に前座、二つ目、真打という芸能の師伝メカニズムの保存であるばかりか、政府が次第に保護に乗り出している中で、今日の落語家は独立した思考精神と「文化的自覚」を持っており、技巧に優れただけの匠ではないということにも表れている。滞在中、神奈川大学COE研究員・RAの宮本大輔氏協力の下、私は落語家桂歌助氏に、また同様に、同大学山口建治教授と宮本氏の協力の下、大道芸人でありその研究者であ

る上島敏昭氏にインタビューする機会に恵まれた。その際、大学卒業後、落語を生涯の職業として選んだ桂歌助氏は次のように語った。「落語は多くの挫折を経験するだろう。だが、もしこれが消えてしまえば、日本ももう存在しない。落語は日本国民が深く愛するものなのだ。」

おわりに

一衣帯水の両国において、伝統文化はなぜこのように異なった境遇にあるのだろうか。まさかわれわれの民間文化が多すぎ、勝手に壊すことができるものだとでもいうのか。「文化的自覚」が実を伴わないスローガンとならないことを願う。

(岳永逸氏は、2005年7月15日～7月28日訪問研究員として来日。)

参考文献

- (1) 岳永逸,『脱離と融入:近代都市社会街頭芸人身分の建構以北京天橋街頭芸人為例』,『民俗曲芸』143(2003.12):202-272;『自我的放逐 天橋街頭芸人の生成と系譜』,北京:北京師範大学出版社。
- (2) 岳永逸,『廟会の生産:対当代河北趙県梨区廟会の田野考察』,北京師範大学博士学位論文,2004;『鄉村廟会の多重叙事 対華北範壯龍牌会の民俗学主義研究』,『民俗曲芸』147(2005.3):101-160;『伝説、廟会与地方社会的互構 対河北C村娘娘廟会の民俗誌研究』,『思想戦線』2005(3):95-102;『田野逐夢 走在華北鄉村廟会現場』,南寧:広西人民出版社。

写真1



昨今、華北鄉村廟会において祭られる「大神」毛沢東

写真2



静岡県熱海市網代で催された阿古古神社例大祭

写真3



新宿末広亭では多くの落語ファンたちが列をなしていた

写真4



自分の手拭いを広げる真打桂歌助氏



2006年度以降の組織変更

2005年度までは「図像資料の体系化と情報発信」(1班)、「身体技法および感性の資料化と体系化」(2班)、「環境と景観の資料化と体系化」(3班)、「文化情報発信の新しい技術の開発」(4班)の4班編成で研究を推進してまいりましたが、中間評価に対応して、2006年度からは大幅な組織変更をいたします。

これまでの1～3班までの8研究課題と従来の4班を再編成した3つの研究班「地域統合情報発信」、「実験展示」、「理論総括研究」を設置し、計11グループで研究を推進いたします。新しい組織は以下のとおりです。

* は課題代表者

	課 題 名	氏 名	備 考
図 像 資 料	マルチ言語版 『絵巻物による日本常民生活絵引』 の編さん刊行	前田 禎彦	
		鈴木 陽一	
		ジョン・ボチャラリ	
		金 貞我	
		君 康道	
	『日本近世・近代生活絵引』 の編さん	田島 佳也	
		西 和夫	
		福田 アジオ	
		中村 ひろ子	
		菊池 勇夫	
	『東アジア生活絵引』の編さん	鈴木 陽一	
		福田 アジオ	
		金 貞我	
		中村 ひろ子	
		佐々木 睦	
身 体 技 法	身体技法の比較研究	廣田 律子	
		山口 建治	
		夏 宇継	
		川田 順造	
	用具と人間の動作の関係の分析	河野 通明	
環 境 ・ 景 観	景観の時系列的な研究	香月 洋一郎	
		浜田 弘明	
		富井 正憲	
		八久保 厚志	
	環境認識とその変遷の研究	香月 洋一郎	
		河野 眞知郎	2006年4月 就任予定

	課 題 名	氏 名	備 考
環境・景観	環境に刻印された人間活動および 災害の痕跡解読	北原 糸子	
		大里 浩秋	
		孫 安石	
		中島 三千男	
		金子 隆一	
		津田 良樹	新規
		三鬼 清一郎	
地域統合情報発信	地域統合情報発信	佐野 賢治	
		橘川 俊忠	
		田島 佳也	
		中村 政則	
		廣田 律子	
		木下 宏揚	
		佐々木 長生	2006年4月 就任予定
		長瀬 一男	
		能登 正人	
		八久保 厚志	
		平井 誠	新規
実験展示	実験展示	中村 ひろ子	
		河野 通明	
		田上 繁	
		福田 アジオ	
		青木 俊也	
		浜田 弘明	
		榎 美香	2006年4月 就任予定
		刈田 均	2006年4月 就任予定
理論総括研究	理論総括研究	的場 昭弘	
		香月 洋一郎	
		橘川 俊忠	
		小馬 徹	
		齊藤 隆弘	
		鈴木 陽一	
		福田 アジオ	
		能登 正人	



受贈資料一覧（書籍・雑誌）

タイトル	発行所
陳 勤建著『生肖趣談』	上海古籍出版社
華東師範大学学報期刊社編輯『華東師範大学学報 哲学社会科学版』 2005年度第1期（第37巻 177 - 180期）	華東師範大学学報期刊社（陳 勤建氏 寄贈）
陳 勤建主編『東方的羅密欧と朱麗叶』	黑龙江人民出版社
陳 勤建著『中国鳥信仰』	学苑出版社
遼寧省博物館資料室編『遼寧考古学、博物館学文献目録』	遼寧省博物館資料室（載 立強氏 寄贈）
김순규『中国書画鑑定』	예술의전당（載 立強氏 寄贈）
국립현대미술관 編『중국근현대오대가』	미술사랑（載 立強氏 寄贈）
白 庚勝主編『中国民間故事全書』全9巻	知識産権出版社
白 庚勝主編『東巴神話研究』	社会科学文献出版社
Sebastian Dobsonほか著『A Much Recorded War』	Museum of Fine Arts
安室 知著『餅と日本人』	雄山閣
安室 知編『環境史研究の課題』	総合研究大学大学院 日本歴史研究専攻・国立歴史民俗博物館
肥田 喜左衛門著『下田の歴史と史蹟』	下田開国博物館（芳野 才利氏 寄贈）
高 福民主編『百俗図』	上海人民美術出版社（馮 豪氏 寄贈）
馬 漢民著『常德盛』	人民文学出版社（馬 漢民氏 寄贈）
Institut national du patrimoine編『Architecture Coloniale et Patrimoine』	Somogy Editions D'art（Geneviève Gallot氏 寄贈）
国立歴史民俗博物館編『国立歴史民俗博物館国際研究集会』	国立歴史民俗博物館（張 長植氏 寄贈）
국립민속박물관 편『한국민속학 일본민속학』	국립민속박물관（張 長植氏 寄贈）
Kaupatez Diogo著『Ryunosuke Akutagawa Contos Fantasticos』	Editora Z
黄 行主編『民族語文』No.1 - 6	中国社会科学院
川上 誠太著『ゲンかつぎ考』	新風書房（田中 英之氏 寄贈）
宋 俊華著『中国古代戲劇服飾研究』	広東高等教育出版社
下関市立美術館編『小田海僊展』	下関市立美術館
下関市立美術館編『下関市立美術館所蔵品目録』	下関市立美術館
萩博物館編『萩博物館展示案内』	萩博物館
The Institute of Cetacean Research and Japan Whaling Association編 『第1回長門開催の記録 日本伝統捕鯨地域サミット』	Nagato City and Institute of Cetacean Research （長門市くじら資料館 寄贈）
青丘文化ホール編『李朝の屏風絵』	青丘文化ホール（下関市立長府博物館 寄贈）
下関市立長府博物館編『海港都市下関 海峡・海道・街道』	下関市立長府博物館
下関市立長府博物館編『三吉慎蔵と坂本竜馬』	下関市立長府博物館
下関市立長府博物館編『白石正一郎と幕末の下関』	下関市立長府博物館
下関市立長府博物館編『東アジアのなかの下関』	下関市立長府博物館
長門市郷土文化研究会編『郷土文化 ながと』	長門市郷土文化研究会（長門市くじら資料館 寄贈）
ニュースレター No.7、8	愛知大学21世紀COEプログラム「国際中国学研究センター」
愛知学院大学文学部紀要 第35号	愛知大学学会
『F-GENSジャーナル』No.4	お茶の水女子大学21世紀COEプログラム「ジェンダー研究のフロンティア」
研究雑誌『先端社会研究』No.3	関西大学21世紀COEプログラム「人類の幸福に資する社会調査」の研究
ニュースレター No.1、2	九州産業大学柿右衛門様式陶芸研究センター
『Adornments of The Samburu in Northern Kenya』	京都大学21世紀COEプログラム 「世界を先導する総合的研究拠点の形成 フィールド・ステーションを 活用した臨地教育・研究体制の確立」
ニュースレター No.9、10	京都大学大学院法学研究科21世紀COEプログラム 「21世紀型法秩序形成プログラム」
ニュースレター『漢字と文化』No.6 オープン・フォーラム『「漢字文化の今2」報告書 東アジアの人名・地名と漢字』	京都大学21世紀COEプログラム「東アジア世界の人文情報学研究教育 拠点 漢字文化の全き継承と発展のために」
『Frontier News』No.11	京都薬科大学創薬科学フロンティア研究センター

(2005年10月～2006年2月)

タイトル	発行所
ニュースレター No.5 国際シンポジウム「Stock Enhancement and Aquaculture Technology」 proceedings	近畿大学21世紀COEプログラム 「クロマグロ等の魚類養殖産業支援型研究拠点」
欧文紀要 No.4 ニュースレター No.5	慶應義塾大学21世紀COEプログラム「多文化多世代交差世界の政治社会 秩序形成 多文化世界における市民意識の動態」
ニュースレター No.11、12 第2回KU-UW 国際シンポジウム報告書	慶應義塾大学21世紀COEプログラム「心の統合的研究センター」 神戸大学21世紀COEプログラム 「安全と共生のための都市空間デザイン戦略」
ニュースレター No.3、4 『脱帝国と多言語化社会のゆくえ』 『Creating an Archive Today』 『Katalog Naskah Palembang』 『視覚のジオポリティクス メディアウォールを突き崩す』 『モリスコ史資料研究文献目録 アルハミアを中心に』 『The Catalogue of Masterials on Myanmar History in Microfilms Deposited in the Centre for East Asian Cultural Studies』No.2 「史資料ハブ 地域文化研究」No.6	静岡大学21世紀COEプログラム「ナノビジョンサイエンスの拠点創成」 東京外国語大学大学院地域文化研究科21世紀COEプログラム 「史資料ハブ地域文化研究拠点」
言語情報学研究報告 No.7、8	東京外国語大学大学院地域文化研究科21世紀COEプログラム 「言語運用を基盤とする言語情報学拠点」
News Letter No.2～5 『SIMOT Research Center NEWS LETTER』 『Wind and Effect News』No.8、9	東京工業大学21世紀COEプログラム 「インスティテューショナル技術経営学」(SIMOT) 東京工芸大学工学研究科 風工学研究センター
『死生学研究』No.6 『DALニュースレター』No.11、12	東京大学大学院人文社会系研究科21世紀COEプログラム 「生命の文化・価値をめぐる死生学の構築」
News Letter No.6、7 2004年度研究成果報告書 『一神教学際研究』別冊(英語版)	東京大学21世紀COEプログラム「心とことば 進化認知科学的展開」 同志社大学21世紀COEプログラム「一神教の学際的研究」(CISMOR)
2004年度年次報告書 2004年度ITECセミナー報告書 2004年度ITEC国際フォーラム報告書 国際Ph. D Workshop on TIM報告書 ニュースレター No.4、5	同志社大学21世紀COEプログラム 「技術・企業・国際競争力の総合研究」(ITEC)
『研究教育活動の概要 ローテート研修制度のための研究室ガイド』 「若手研究者のためのCOE国際セミナー」報告書 「第3回国際シンポジウム」報告書	東北大学21世紀COEプログラム「言語・認知総合科学戦略研究教育拠点」 東洋大学21世紀COE
国際シンポジウム「ストレス制御のメカニズム」プロシーディング FCS年次報告書『平成16～17年におけるプログラムの展開』	徳島大学21世紀COEプログラム「ストレス制御をめざす栄養科学」 名古屋大学21世紀COEプログラム「計算科学フロンティア」
国際シンポジウム「古代日本の言語文化」配布資料 ニュースレター『奈良と古代』No.4、5 COE報告集 No.2『南都炎上とその再建をめぐって』	奈良女子大学21世紀COEプログラム 「古代日本形成の特質解明の研究教育拠点」
ニュースレター No.6、7	一橋大学21世紀COEプログラム 「現代経済システムの規範的評価と社会的選択」
『外国人研究者による研究評価』	兵庫県立大学大学院21世紀COEプログラム拠点形成計画 「構造生物学を軸とした分子生命科学の展開」
『研究中心大学・大学院における広報の現状と研究知見発信のあり方』 <調査結果>、<事例集> 第1回研究会報告書	平成17年度文部科学省科学研究費補助金 萌芽研究「大学から社会への情報発信の研究」 名古屋大学大学院理学研究科天体物理学研究室
紀要『国際日本学研究』 年報2004 『HOSEI I.J.S.The Newsletter』No.1、2 21世紀COE国際日本学研究叢書2『国史日本学の構築に向けて』 研究成果報告集『国際日本学』No.3 『ポスト・ソヴィエト期(1991～2004)のロシアにおける日本研究』 『日中文化関係を考える 日中相互認識の「ずれ」を中心に』 法政大学国際日本学シンポジウム報告書『日中の文化関係を考える(その2) 文化摩擦(ずれ)から文化交流(相互理解)へ』	法政大学21世紀COEプログラム 「日本発信の国際日本学の構築」
News Letter No.2	早稲田大学21世紀COEプログラム「演劇の総合的研究と演劇学の確立」



主な研究活動

2005年度

研究推進会議

- 第13回 1月11日（日本学術振興会特別研究員候補者選考、2006年度研究計画・予算、第3 四半期の予算執行について 他）
- 第14回 1月25日（日本学術振興会特別研究員候補者選考について 他）
- 第15回 2月1日（COE教員（非常勤講師）人事の承認、2006年度組織体制・研究計画について 他）
- 第16回 3月8日（COE研究員（PD）選考、2006年度組織体制、2006年度COE補助金内定通知、RA研究員募集要項について 他）
- 第17回 3月15日（2006年度研究拠点形成費交付申請書類、進捗状況報告書提出書類について 他）

2005年度

研究会

班

3月6日 1班公開研究会 「『洛中洛外図屏風』を読む」

- 鈴木 陽一 / 「『姑蘇繁華図』と『点石斎画報』」
- 田島 佳也 / 「『江差浜鯨漁之図』を読む」
- 横田 冬彦（京都橘大学教授） / 「『洛中洛外図屏風』を読む」



3月16日・地域統合情報発信班 公開研究会

- 野間 晴雄（関西大学文学部教授） / 「水田の認識と多機能性の複合類型試論
稲作の起源と執着をめぐる」

PD・RA

3月14日 「海外提携研究機関 派遣研究員報告会」

- 藤永 豪（COE研究員・PD）
「北京市における景観変化について」
派遣先：北京師範大学民俗学与文化人類学研究所
派遣期間：2004年11月19日～12月1日
- 王 京（COE研究員・RA）
「1930～1940年代の日本民俗学と中国」
派遣先：北京師範大学民俗学与文化人類学研究所
派遣期間：2005年7月6日～19日
- 彭 偉文（COE研究員・RA）
「上海およびその周辺におけるさまざまな靈獣舞について」
派遣先：華東師範大学中国民俗保護開発研究センター 派遣期間：2005年9月17日～30日
- 宮本 大輔（COE研究員・RA）
「浙江人の言語評価 大学生を中心に」
派遣先：浙江大学日本文化研究所 派遣期間：2005年11月1日～14日



主な研究活動

櫻村 賢二 (COE研究員・PD)

「オートバイ宅急便からみる韓国社会について」

派遣先：延世大学中央博物館 派遣期間：2005年12月1日～14日

大西 万知子 (歴史民俗資料学研究科博士後期課程)

「アジア・ヨーロッパ・ラテンアメリカの情報発信(展示)の発達比較」

派遣先：サンパウロ大学日本文化研究所 派遣期間：2005年12月2日～18日

特別報告

丸山 泰明 (COE研究員・PD)

「デンマークとスウェーデンの博物館で考えた二、三のこと」

現地調査

(2006年1月～3月実施分)

北原 系子	愛知県豊田市 (2月1日～2日)
日本赤十字豊田看護大学で関東大震災の日本赤十字社救護活動の調査	
佐野 賢治、中村 政則	福島県南会津郡 (2月3日～6日)
只見町小林地区田植え踊りのデジタルコンテンツ作成のための現地調査、只見町文化情報発信システム検討	
北原 系子	大阪府大阪市 (2月28日)
大阪市史編纂所所蔵資料「淀川流域水害図」の閲覧と調査	
河野 通明	三重県名張市・伊賀市他 (3月8日～11日)
名張市教育委員会収蔵庫・伊賀町歴史資料館他での在来農具の比較調査	
河野 通明	山口県柳井市・周防大島町他 (3月15日～19日)
柳井市民具収蔵庫・周防大島文化交流センター他での在来農具の比較調査	
君 康道	愛媛県松山市・広島県廿日市市 (3月17日～20日)
宝蔵寺・岩屋寺・蔵島神社において「日本常民生活絵引き」マルチ言語版作成のための確認調査	
大里 浩秋、孫 安石 (3班)	台湾 台北 (3月17日～23日)
台北中央研究院・国史館に関する資料調査	
山口 建治	中国 浙江省温州・泰順県 (3月18日～24日)
身体技法研究の一環として泰順県木偶劇団の人形劇調査	
中村 ひろ子	大阪府吹田市・福井県福井市・石川県金沢市 (3月21日～22日)
国立民族学博物館・福井県立博物館・金沢21世紀美術館における実験展示実施のための先進展示等の視察調査	
河野 通明	三重県松阪市・四日市市他 (3月21日～24日)
松阪市立歴史民俗資料館・四日市市立博物館他での在来農具の比較調査	
浜田 弘明	石川県金沢市・滋賀県草津市 (3月22日～23日)
金沢21世紀美術館・琵琶湖博物館における実験展示実施のための先進展示等の視察調査	
八久保 厚志	香川県小豆島 (3月23日～25日)
瀬戸内海の漁村景観について記録・資料収集	
青木 俊也	大阪府吹田市・石川県金沢市他 (3月24日～25日)
国立民族学博物館・金沢21世紀美術館他での実験展示準備のための現地調査	
君 康道	北海道札幌市 (3月24日～27日)
北海道立文書館・北海道大学附属図書館での絵引き作成のための確認調査	
ジョン・ボチャリ	岩手県一関市・遠野市他 (3月29日～31日)
一関博物館・遠野市立博物館他での図像資料現地調査	



『民俗学誌 (Folklore Studies)』について

王 京 (COE研究員・RA)

北平私立輔仁大学 (Catholic University of Peking, 1925 ~ 1952) 附属の東方人類学博物館 (Museum of Oriental Ethnology) は日本占領下の1940年代に創立され、欧文雑誌『民俗学誌』を発行していた。中国での民俗研究や日本民俗学との関係を考える上で重要な事実であるが、その詳細は不明のままだった。そこで北京師範大学が所蔵する「北平私立輔仁大学檔案」とその他の関連資料により、同誌の初歩的な整理と紹介を試みたい。

輔仁大学は1930年代に北京の五大名門校に数えられ、戦時下においても独逸系教会が運営したという理由で閉鎖されることなく経営を続け、北京における高等教育の空白を埋めながら大きく発展していたが、新中国成立後、北京師範大学や他の大学に編入され、姿を消した。

同大学には1940年に東方人類学博物館がつくられた。1941年度の『私立輔仁大学一覽』では「東方人類学博物館」の項目が見え、「葉徳礼主任、趙衛邦事務員、陳宗祥助理員」という組織であったことが分かる。そして大学の卒業アルバムである『輔仁年刊』(1942年版)にも「輔仁博物館」という項目があり、博物館の建物、事務室風景など計4枚の写真が掲載されている。

博物館の責任者は神言会神父葉徳礼 (エーデル、Matthias Eder, 1902 ~ 1980) で、彼は輔仁大学に赴任する前、パリやベルリンなどで4年間日本学を研究していた。趙衛邦 (輔仁大学大学院史学科卒、1942年から研究員) と許道齡 (北京大学史学部卒、1942年から陳宗祥に代わって助理員) が中心メンバーであった。

博物館の重要な活動の一つは、年刊『民俗学誌』の発行である。雑誌の登録申請は1942年10月で、当時の職員には、李慰祖助理員 (輔仁大学大学院在学) の名前も見える。保証人は校務長首席秘書兼日本語文学部主任の細井次郎であった。雑誌は英語、独語、仏語などが混在し、一部英文及び中国語の要約を付けている。

創刊号はエーデルによる序言を巻頭に、本文109頁で、主な内容は以下のようである。

- ・ S.M. Shirokogoroff 「中国の民族学研究」
- ・ 趙衛邦 「扶風の起源と発達」 「中国現代民俗学研究 上」
- ・ Josef Thiel 「祈願成就のかたしる焼き」
- ・ Ch'en Hsiang-Chun 「驅邪符に関する幾つかの事例」
- ・ Karl Reitz 「へいはく・みてぐら・ごへい(幣帛)」
- ・ エーデルの二つの書評

雑誌の創刊は早速、輔仁大学日本語文学部の講師を務めていた直江広治より柳田国男に知らされ (1942年11月11日付書簡) まもなく『民間伝承』8-9 (1943年1月) で「『民俗学誌』創刊」(関敬吾) として日本の学界にも紹介された。

同誌の創刊は遅れて台湾の『民俗台湾』30号 (1943年12月) でも報じられた。同号に「大東亜民俗学の建設と『民俗台湾』の使命」として、1943年10月17日に東京の柳田宅で行われた座談会の記録も載せられている。この座談会は民間伝承の会として、日本民俗学の東アジア規模の展開を意識した「柳田国男先生古稀記念事業」の一環であった。『民俗台湾』の誌上に北京の『民俗学誌』が紹介されたことも、同事業との関連が考えられる。

1943年10月、直江はエーデルの賛同の下で柳田記念のために『民俗学誌』で日本民俗学特集を編集することを、『民間伝承』の編集長・橋浦泰雄に報告し、柳田の写真、年譜及び著作年表の送付を依頼した。この特集 (Vol. -2, 1944年) は柳田の写真と柳田への献辞を巻頭に飾り、全155頁の中で独逸語に訳された「柳田国男：日本民俗学 起源・発展と現状」が76頁を占め、その他日本に関する論文が2本収録されている。

『炭焼日記』の1945年3月3日条では、柳田は「北京よりの『民俗学誌』とどく。大藤君の書いた日本民俗学史の全訳の、エーデル氏訳」と記している。

終戦後の1946年10月に、国民政府の内政部に『民俗学誌』の登録が改めて申請された。メンバーはエーデル、趙、許と書記の汪鏡民で、資本金160万円であった。この申請は1947年4月12日に許可された。

国共内戦後、エーデルは日本に移住し、雑誌の出版を継続していた。1952年以降、中国語の誌名がなくなり、出版元も S.V.D Research Institute (東京1953 ~ 56)、神言会 (東京1957 ~ 62) と変わり、1963年以降さらに『Asian Folklore Studies』(東京: Society for Asian Folklore 1963 ~ 72 名古屋: Asian Folklore Institute 1973 ~) と改名した。

エーデルは1980年4月27日に日本で亡くなり、その蔵書は、戦後、彼が所員を務めていた南山大学人類学研究所に寄贈された。なお、『Asian Folklore Studies』は同研究所に受け継がれ、いまでも年2号出版されている。

神奈川大学21世紀COEプログラム事業推進担当者の廣田教授は、本プログラム研究活動の一環として行っている、デジタル資料による身体技法分析の取組みに関する報告を韓国 高麗大学校民族文化研究院民俗学研究所主催の学会においておこなった。

「2006 国際学術大会 18世紀東アジアの公演文化」

開催日時：2006年2月24日～25日

開催場所：高麗大学校民族文化研究院

発表者：廣田 律子

発表タイトル：「デジタル技術による東アジア芸能比較研究試論」

主催：高麗大学校民族文化研究院 民俗学研究所

貴重資料の紹介

Baltzer, F. *Die Architektur der Kultbauten Japans*
「日本の神社建築」(Berlin:Ernest, 1907)



Scenes From Open Air in Japan (photographed by W.K.BURTON, plates by K.OGAWA, text by J.MURDOCH, 1893(明治26年))

貴重資料の紹介
2005年度に購入した資料

2005年度退任の研究担当者

本学COEプログラムの共同研究に長い間ご協力頂き、ありがとうございました。

COE共同研究員

2006年3月31日付

芦澤 玖美

落合 一泰

須山 聡

鈴木 廣之

宇佐見 義之

丸山 宏

2005年度 神奈川大学21世紀COEプログラム 外部評価の実施

実施日：2006年2月13日、17日

会場：神奈川大学横浜キャンパス21号館304会議室

2月13日に本学COEプログラム外部評価委員である立正大学文学部教授の黒田日出男氏、慶應義塾大学文学部教授の鈴木正崇氏、また同17日には静岡大学情報学部教授の八重樫純樹氏による外部評価が実施されました。



編集後記

活字離れを反映してか、昨年7月、文字・活字文化振興法が施行された。思えば、高校時代の新聞編集から、大学での研究誌の鉄筆によるガリ切り、その後のさまざまな原稿のワープロ、パソコン入力まで、文字・活字による編集作業には随分と慣れ親しんできた。このCOEプロジェクトが、対照的に、現代社会において非文字資料の持つ意味、非文字文化とは何なのかを考える契機になればとも思う。今号で3年目の編集が終わり、次号からは研究成果を中心に、情報発信の場となることを期待したい。（佐野）

今号の特集も前号の国際シンポジウムに引き続き、公開研究会の開催レポートになりました。中国や韓国から招いた先生方の研究報告を、紙幅の関係で詳細とはいかないながら、各報告の要旨がお伝えできていれば幸いです。今後は研究会やシンポジウムについて、本誌で取り扱う機会は増えていきます。速報としてはホームページで、記録としては本誌でお伝えしていきます。（関）

COE刊行物

シンポジウム報告1

「版画と写真 19世紀後半
出来事とイメージの創出」

2005年11月20日に開催した第1回
国際シンポジウム プレシンポジウムの
発表者が論点を整理、内容を深めた
論文を収録したもの。

2006年3月発行、A4判 95頁。

編集：人類文化研究のための

非文字資料の体系化 第3班・第4班

発行：神奈川大学21世紀COEプログラム研究推進会議

内容：写真は出来事をどのようにとらえてきたか(木下直之)、
浮世絵は出来事をどのようにとらえてきたか(原信田實) 変貌
する明治の図録(鈴木廣之)、見える民族・見えない民族(増
野恵子)、内田九一の「西国・九州巡幸写真」の位置(金子隆
一)、メディアとしての災害写真(北原系子)



歴史民俗資料学研究所

『歴史民俗資料学研究』第11号

2006年3月発行、A5判 345頁。

発行：神奈川大学大学院

歴史民俗資料学研究所

内容：せともの祭と瀬戸物人形(小
林公子) ミルクとアカマタ(古谷野
洋子) 銭屋五兵衛をめぐる歴史叙述
と歴史意識(高野宏康) 大浦の民族
誌(福島緑) 明治・大正期における
特許資料と唐箕の改良(内藤大海)

民俗学の新材料(岡田翔平)「河童信仰の歴史研究」序説(小
馬徹) フランスにおける柳田国男の紹介と評価(フレデリック・
ルシーニュ) I・A・サマリン著・南サハリン(旧樺太)にお
ける神社(ムカイダイス)、繁田信一著『平安貴族と陰陽師
安部晴明の歴史民俗学』(織田洋行) 祁景澄著『中国のイン
ターネットにおける対日言論分析 理論と実証の模索』(高
江州昌哉)



日本常民文化研究所

神奈川大学日本常民文化研究所
論集22『歴史と民俗』

2006年3月発行、A5判 293頁。

編集：神奈川大学

日本常民文化研究所

発行所：(株)平凡社

内容：中山道鶴沼宿の様相(西和夫)、
オーラル・ヒストリーの可能性(中村
政則) <第8回常民文化研究講座報告>身
体表現としての芸能とその継承(廣田律子) <資料紹介>中村為
治・満蒙開拓従軍紀行(山口徹)、アチックミュージアム日誌
(4) 昭和13年・14年・15年1月～6月



「水産総合研究センター所蔵古文書目録 福島県・
茨城県・栃木県・千葉県(補遺)関係史料」

2006年3月発行、A4判 164頁。

編集・発行：独立行政法人水産総合研究センター中央

水産研究所・神奈川大学日本常民文化研究所

中央水産研究所所蔵古文書(漁業制度資料)の概要
全100資料群の概要と収集・整理の経過

2006年3月発行、A4判 116頁。

編集・発行：独立行政法人水産総合研究センター中央

水産研究所・神奈川大学日本常民文化研究所

第7回歴史民俗資料学研究会

講師：大塚和義氏(大阪学院大学教授・国立民族学博物
館名誉教授)

テーマ：「文化展示の可能性 博物館におけるアイヌ展示」

会場：神奈川大学横浜キャンパス1号館804室

外国語学研究所 中国言語文化専攻

『神奈川大学大学院 言語と文化論集』第12号

2005年12月発行、A5判 176頁。

編集・発行：神奈川大学大学院

外国語学研究所

内容：ワーズワスと芭蕉(岩崎豊太
郎) Going Beyond the Gender
Boundary(濱田あやの) 英語のイ
ントネーション分析(安田香織) 近
代中国文学作品における罵倒語の使
用の要因(渡辺博文)『詩経』から
見た色彩語(劉湯氷)雲南省都市部
における民族語使用状況(宮本大輔)、
「把」構文の目的語
について(布川雅英)



刊行物や催し物については該当する
各所にお問い合わせください。

▶ 045-481-5661(代)

日本常民文化研究所(内線4358) 歴史民俗資料学研究所(内線4024)
中国語共同研究室(内線4525) COE支援事務局(内線3532)

非文字資料研究 No.11

発行日 第11号 2006年3月31日発行

編集・発行 神奈川大学21世紀COEプログラム「人類文化研究のための非文字資料の体系化」研究推進会議
Kanagawa University 21st Century COE Program

Systematization of Nonwritten Cultural Materials for the Study of Human Societies

〒221-8686 横浜市神奈川区六角橋3-27-1

Tel.045-481-5661

Fax.045-491-0659

URL <http://www.himoji.jp/>

